
人間嫌いな三十路目前の I S 使い

暗傍黒荏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間嫌いな三十路目前のIS使い

【Nコード】

N3110T

【作者名】

暗傍黒荏

【あらすじ】

人間嫌いでツンデレな三十路目前の転生者（男）が、ISの世界で巻き起こす騒動に立ち向かう。さあ、行くぜ「焰神」！！。相変わらず無謀な挑戦をする、トランスフォーマーとプラモをこよなく愛する作者が贈る、変わった（？）転生物。力技地獄牢固めラブコメディスタート！プロットは勿論ない！！（注、作者は原作を持ってません。なので、間違いな部分があるかもしれません）

どうでもいいんだよ（前書き）

ISに月光蝶みたいな機能を出してほしい。そう思いませんか？
と、バカな問いかけをいつもしてる作者です。ISの知識は皆無と
いう無謀っぷりですけど、宜しくお願いします。

最近ハマってるセリフ。

「熱い心に、不可能はない！」
誰の台詞でしょう？

どうも、暗傍黒荏でした

どうでもいいんだよ

ふあああ。と、欠伸をひとつ欠きながら、男が一本道を歩く。背中のランドセルには何も入っていない。すかさずのランドセルに、背負う必要があるのか？　と思うが、その疑問に意味などは無いのだろう。だから問うても、意味が無い。

また欠伸をひとつ。

初夏の日差しが、彼の肌に熱を与える。紫外線対策のしてない肌は、成す術なく紫外線を甘受する。まあ、今からそんな事を気にしても意味が無いのだけだ。男だし。

また欠伸をする。今度は長い。

ふと前方を見る。と言っても、歩く以上わざわざ言わなくても前方は見る事になるのだ。

何か、雑音が聞こえる。男女に無愛想女……？

よく見ると、学校の校門の向こう。校庭に、少女と向かい合う形で複数人の男子。

ああ、よくあるいじめだろう。それも低レベルな。

少女二人を囲う形で、罵声を浴びせてる。

その連中に男は見覚えがあった。記憶の糸を辿る。が、すぐにあきらめた。思い出すの

も億劫だし、何より、覚えてたら覚えてたで、それはそれで不愉快だ。小学校なんても

はクラスと勉強を覚えてればいい。他を覚えるのは面倒だ。こっちは転生してるんだ。小学生の勉強はできるから無駄に等しい。

しかし、法には逆らえない。この世界では、自分はただの小学生なのだから。

物思いに耽つてると、何か蹴っ飛ばした感触。しかもクリーンヒット。

「痛ええ!!」

わめく声を無視し、立ち止ってみる。右、男の子二人。左、同じく男の子一人。最後に前、虫の息のカス。ちよつと踏んでみる。ぎゃあゝと、啼く。

「お前、何すんだ!! この男女と無愛想に味方すんのか!!」

「いや全然」

「やるぞ!!」

「オウ!!」

無視された。

いつの間にか復活した少年が起きあがり、男を襲う。それに続く様に他の少年達も襲う

男は溜息をし、足を突き出す。相手の足に絡まる様に。

まず最初に転んだのは最初に襲いかかってきた少年。その少年に釣られまた転んで行く

やがて、全員がすっ転ぶ。

男は背後にいた少女達の手を握り――その場から逃げた。

「何のつもり……ですか」

上級生と分かったからか、少女は言い直しながら問う。明らかに余計な事を。という目だ。もう一人はこちらを見ないで無視。

男は答える。

「別に、どうでもいいだろ。ぼくとしてたら足が当たっちまって、それで逃げる事になったんだ。お前らを連れてきたのも後で何か言われたら、こいつ等を助ける為だったんで」とか誤魔化す為だ」

男は投げやりに返しながら、二人を見る。自分を見ている少女は髪が黒く、眼つき悪し自身と同じ位だろう。もう一人は、うさ耳？ それらしきものを付けた少女。めんどくさそうにしている。

（あーあ。とつとつ、教室で寝たい）

胸中でぼやく。本音を言えば、ここからぬけだしたいのだが、目の前の少女が許さない理由を聞くまでは動かないらしい。さっきのでは不満らしい。チャームまで時間がある。

さて、どうするか。
まったく鬱陶しい。

そう吐き捨てる、ふと気付く。この少女達、どこかで見た覚えがある。

確か……前に、前世で、書店に……

(いや、ないない)

かぶり振って否定した。本の世界？ 確かに転生というありえない体験はしたが、これはない。

男を不審に思ったのか、黒髪少女は怪訝そうに見つめてる。うさ耳は無視してる。

男は溜息つきながら、告げる。

「だ〜か〜ら〜。俺はもうどうでもいいんだよ、さっきのことなんか、お前らも忘れろ。
ついでに俺の事も忘れろ。いや絶対忘れろ、俺もお前らのこと忘れてやるから。はいこれでこの話は終わりお疲れさん」

矢継ぎ早にそう言い、黒髪の少女を黙らせ、男は即座にその場から去ろうとする。

「ねえ、待ってよ」

黒髪少女で無い、他の少女の声。振り向くと、先ほどまで無視を決め込んでたうさ耳だった。

「君、名前なんて言うの？」

「黒兎時世」
くろうときよ

と言ったところで、時世は己の愚行を呪った。

名乗ったらこつちが忘れようと、向こうが覚えるでないか。
舌打ちをし、その場から離れた。

どうでもいいんだよ（後書き）

感想が力に変わります。みんな〜オラに元気（感想）をわけてくれ〜

それでは〜

お節介焼きなんだなお前は（前書き）

いきなり飛んで、現在の話です。

お節介焼きなんだなお前は

ふぁあゝ、欠伸をしながら、目を開ける。瞼の裏に見えた光景はすでに消えてた。今見えるのは変わり映えしない、されど見ごたえのある、春の蒼い空。桜の花びらが宙に舞いのが見え、一枚の絵画を思わせるようだった。

空は数少ない興味の対象だった。様々な表情を持つその様は、まるで人間の様な。同じ光景は二度と見れない。同じように見えるだけで、厳密に言えば同じでない。似て非なる物だ。

だから一度見た空は忘れない様にしている。人の顔なんかを覚えるよりよっぽど有意義だ。脳の容量に風景を録画し、ふと思い返すのは先ほどの夢。

「たつく、ずいぶんとしみ்த்தれた夢を見ちまったもんだ」

忌々しく吐き捨てる。こういうのは早く忘れた方がいい。

時世はまた空を見る。彼が今寝っ転がってる草原……というには狭い、広場には誰もいない。

静かで快適だ。草の匂いを嗅ぎながら、また青空を――――

「何をしてるんだ。こんな所で」

見れたのは、空でなく女性だった。自分と同じ位に釣りあがった吊り目の黒髪の女性。

違うのは、その女性は凛々しい、で。自分は凶暴、だ。彼女は時世を見下ろしながら溜

息混じりに呟く。

「まったく、お前は相変わらずだな。いい加減治らんのか、そのサボリ癖は」

「いいんだよ、必要な時に必要なことをするのが俺だからな。今は別に必要じゃねえだろ」

空を見たまま、時世は返す。あきらかに女性を見てないが、これがいづものやり取りだ
時代が顔を見ずに、こんな風に言葉を交わし合うのが。

（あれから何年経ったんだ。こいつとこんな風に関わる様に――――
いや、こいつが関わってきたんだっとな、あいつと一緒に）

時世は起き上がり、首から下げた球体のダイヤがはまったネックレスを手で遊ぶ。

「そういや、あいつともしばらく会ってないな」

ふと声を漏らす。どうも感傷的になっていけない。過去の事を思い返すにはまだ早い。

まったく歳など取りたくない物だ。
腰を上げて、ぐっと背伸びをする。背中の骨からぼきぼきと音が鳴った。

「大体お前こそこんな所でただの三十路目前の用務員に時間を割いてないでとっとと入学式に行けよ。確か一夏が入学すんだろ」

「何が、ただの用務員だ」

「事実そうだろ」

「IS学園創設者、および元ドイツ軍戦術教官。現在IS戦闘技能特別外部顧問の肩書を持つ用務員は普通とは言わない」

竹でも割る様にきっぱりと述べる。時世はようやく視線を女性に向ける。

女性はやはり、呆れた表情だった。

「でも、お前の方が地位が上だろ。俺はあくまで外部的な顧問だし、IS学園創設者と言っても……」

「そう、私達の為にお前はこの学園を創った。兵器として戦わせない為に」

「……………」

「その為にお前はアラスカ条約を提案し、政府に交渉をして、この学園を……」

「今更そんな事に何の意味がある」

女性の台詞を遮る様に時世は切りだす。視線は女性に向けたままだ。

「俺は別にお前らのことなんか考えてない。興味もない。昔から言

ってんだろ、どうでも
いい、てな」

「よく言うよ」

凜々しさのあった表情から打って変わった穏やかな表情。たまに
浮かべるこの表情を見
るたび時世は顔を逸らす。今回も逸らした。

「どうでもいいって言う割には、お節介焼きなんだなお前は」

「お前は礼節をわきまえてる癖に年長者に対する敬いの心は無いんだな」

「お前にだけだ」

「さよか」

言い返すのを諦め、時世は歩き出した。

「しょうねえから行ってやるよ。俺の――千冬のかわいい弟分の
花の舞台だ。行ってやるのもまた粹だしな」

「そうか」

おそらく表情はそのままなのだろう、穏やかな口調だ。
時世は歩を速めて会場に向かう。吹いてくる風が熱くなった顔に
当たって丁度良かった。

お節介焼きなんだなお前は（後書き）

いやゝ原作を持ってないから想像で書くのはきつい。早くどうにかしないと。と焦ってる暗傍黒荏です。

今回はいきなり飛んでの話どうでしたか。何かいきなり意外な事発覚の話でしたゝ

多分このあとは原作沿いな話だと思います（プロット無いから）。

無謀ばっかな作者ですけど、宜しくお願いします。

追伸、何か指摘、もしくはおかしい所がありましたらすぐに感想へ。すぐに直します。

本当にどうでもいい事には事欠かない人生だぜ（前書き）

一夏登場！！ 殆ど原作沿いになってる！（まあ当然か）

ふと思ったんですけど、核ミサイルとISってどっちが強いんだろう？

絶対防衛で防ぎきれんのだろうか？ まあ、そんな事は置いて、主人公の年齢。どうしよう？ 大まかに三十路前って感じなんだけど、詳しい時系列が分からないから決めかねてます。無難に、27、8か……

本当にどうでもいい事には事欠かない人生だぜ

（何故、こうなった……）

本日何回目か、数えるのも億劫な、そんな何回目かのまったく同じ眩きを、一夏は胸中で繰り返す。

憂鬱とはこういうものなのだろうか。もしもこれが憂鬱と言うなら、二度と味わいたくない。明らかに教室内の視線が全て自分に集中している。前列の席なので、振り向かないと分からない筈だが、見なくても分かった。なぜなら、この教室内で、いや、世界中で、間違いなく自分は異質だからだ。

そりゃそうだ、女子高に男子生徒がいればそうなる。しかも、世界で唯一ISを使える男ならなおさらだ。

「はい、それでは、出席をとりまーす」

おっとりとした、そんな女性の声ではっと我に返る。そうだった、今はホームルーム中だった。

黒板の前で背の低い――ヘタをすれば生徒と間違われるんじゃないか――そんな女教師が自分の自己紹介から始めている。

（はい、早く終わらないかな……）

この視線はあまりにもキツイ。早くも激しい疲労感を感じる。せ

めて、せめて時兄が担任だったら……

そんな事を思ってしまう。そんなことある筈なのに、時兄がここにいる筈なのに。

兄の様に慕ってるひねくれ者が頭に浮かぶ。あのひねくれ者は今頃、どこで何をしてるのだろうか？

一夏は溜息をつきながら、ひとりごちる。すると、はたと教室が静まり返ってるのに気

づく。一人疑問符を浮かべると——たしか副担任の——山田麻耶先生が、こちらの顔を覗きこむ。

「織斑くん、織斑一夏くん」

「ふえ、あ、はい」

我ながら間抜けな声を出してしまった。からかわれる前に誤魔化さない。

一夏は、問い返す。

「な、何でしょうか？」

「自己紹介、いいかな？ 次、織斑君の番なんだけど——」

ああ、早速ミスしてしまった。山田先生が謝ってる。こんな時、時兄だったら『うるせえ、黙れよ』って言うんだろうな、表面上は他人には非情なあの兄は。

幼馴染はさっきから助けてくれない。

一夏は意を決し、立ち上がる。自分は時兄でない、自分なりにやろう。それで晩回だ。

自分に言い聞かせ、一夏は口を開く。

「織斑一夏です。宜しくお願いします」

と、これで終わりの筈だった。が、終われなかった。周りから、期待の眼差しが身体に突き刺さったからだ。明らかに、もっと紹介してくれと訴えている。

（ああ、時兄のあの非常識な性格が羨ましい）

普段思う事のない考えがふと思い浮かぶ。常に唯我独尊のあの性格。こんな時、便利なのだろうな。

息を吸って一夏は付け加える。最後の手段。

「以上です」

がたっ

駄目だったようだ。ずっとこける音が周りから聞こえる。

あたふたしてると……

がつん！

激しい衝撃が脳天から足のつま先まで、稲妻のように往来する。これは……？

一夏は顔を上げ、そこにいる姉を見て、声を上げる。

「げえ！ 関羽！」

ばきっ！

またも、頭上に衝撃が走る。千冬姉は呆れ混じりに述べる。

「誰が三国志の英雄だ、バカ者が」

今だにのた打ち回ってる一夏を一瞥し、千冬姉は山田先生に詫びを入れながら教壇に立つ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人をこの一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ
私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。そして
君達の仕事はこの一年間鍛え抜くことだ。私に逆らってもいいが、言うことは聞け。いいな」

力強く、そして凛々しくそう宣言する千冬姉を見ながら、これらの学園生活に一抹の不安がよぎった。それこそ、後ろからきゅーきゅーわめいてる女子たちの歓声など、気にならないほどに。

織斑千冬は自慢の姉であり、親でもある。

幼い時に突然蒸発した両親の代わりに、この姉は自分を養ってくれた。まだ自身も学生であったにも関わらず、だ。そんな身でありながら、この姉はIS

操縦者最強の証。『ブ

リユニヒルデ』の称号を持つ（本人はその称号を嫌がっていた）、最強の覇者。全世界の

IS使いから羨望を集める存在。だが、現在は引退しているらしい。最近家で見かけない
と思ったら、

（こんな所で、教師してたのかよ。何か心配して損した気分だ）

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

今だ茫然と立ち尽くす一夏に、千冬姉は冷たい目線で問う。一夏は慌てて言い訳をする。

聞く耳を持つだろうか？ この姉は——多分聞かないだろう。そう悲しく確信しながら、言葉を発す。

「いや、千冬姉、俺は……」

ばこん！

「織斑先生、だ。バカ者が」

どうやら、言い訳以前の問題だったようだ。一夏は再び頭を抱えながら、力無く返事する。

「……はい」

その返事は、どこか嬉し気だった。

空は今朝見た時と変わらずに澄んでいた。鮮やかな青に、純白の雲が浮かんでいる。何

となく、その雲が地に落ちるんじゃないか。そんな事を思いながら、時世は学園の屋上か

ら見上げていた。バカな考えだ。次に思い浮かんだのはこれだった。そしてまた、ふと思

う。かつてイカロスは、蠟で作った羽で空へ舞った。だが彼は父の警告を無視し高く飛んでしまった。結果、彼は羽が熱で溶けてしまいそのまま落ちて行った。

IS使いも同じ末路をたどるのだろうか？ イカロスの様に驕り高ぶって……

彼が落ちたのは海だがIS使いは何処に落ちるのだろうか？ ISと言う翼を失って。

胸に下げてる首飾りのチェーン部分を弄ぶ——俺も、落ちるのだろうか。

「女尊男卑か……なんか、笑えねえな。まあどうでもいいが」

と、哲学ぶるのを止め、いつもの通りに寝っ転がる。この体勢の方がやはり見えやすい。

ふああ。と欠伸を漏らしながら、空を脳内フォルダに記録する。

その時、何か来る気配。また千冬だったら厄介だ。あいつや束は何故か俺の居場所が把

握できる。前にその事に何度か疑問に持ち聞いてみたが、全て何となくという納得のいかないうた。

時世は即座に置きあがり、物陰に隠れる。気配を殺し、静かに出

て来る人間を見る。

何となく物悲しくなる。かぶり振って、その考えをうち払う。出てきたのは二人だった。男と女の学生——男の学生？

時世はそこで、はたと気づく。この学園で男の学生は一人。一夏か。

そしてもう一人にも見覚えがあった。束の妹か。

（久々の再会か……）

確か、何年か前に引越したと言ってた気がする。どうしてもよく忘れてた。

何か会話をしているようだ。その光景を見ながら時世は悟る。

（あゝ、あいつもおちたのか）

これで何人目だよ。と溜め息交じりに呟く。あの弟分はやたら女性にもてる。千冬も女

性にもてることから、織斑家は女殺しの一族なんじゃないか？ と何度思った事か。

「まったく、タチの悪い」

うめきながら、時世はその場から離れた。

あいつらに自分が居る事がばれて、面倒な質問をされたくない。

「まったく、本当にどうでもいい事には事欠かない人生だぜ」

忌々しげに、吐き捨てる。

本当にどうでもいい事には事欠かない人生だぜ（後書き）

作者の脳内のI Sイメージ

一夏———ウルトラマグナス

箒———ロデイマスコンボイ

時世———コンボイ

私達も……楽しんでじゃう？（前書き）

どうも、最近髪を切った暗傍です。

今回、前からやってみたかった事に挑戦してみました。

主人公のIS早く出してえー

私達も……楽しんじゃう？

ISが発表されてから、十年近くになる。

ほんの少し、その歴史について（と言ってもそんなに長くもない）語るとしよう。

正式名称インフィニティストラトス。その開発コンセプトは宇宙空間での活動を想定し

た（本当かどうかは分かんが建前上はそうなってる）マルチフォームスーツ。

そして、その開発者は篠ノ乃東と言う女性（いや、当時は少女か）。

彼女が開発したこの”IS”は当時の世界が保有してた技術力の何歩先も進んだ技術が

使われており、世界中の学者が驚愕した。ISの登場は世界の科学技術の向上の一役を買

った。が、それでも、十年経った今だ、世界は開発当時の彼女にすら追いついていない。

この事から篠ノ乃東は天才であることがうかがえる。

閑話休題。

そんな性能を保有したISだが、十年前の当時は全く注目されなかった。

ISが本格的に注目を集める事になったのは、ある二つの事件による。

まずは”白騎士事件”から説明しよう。

この事件は日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキング

され、2341発以上のミサイルが発射されるも、その約半数をIS”白騎士”が迎撃した事件。

次は、”龍騎士事件”と呼ばれる事件。と言ってもこちらは、ネットに転がってる都市伝説も様なモノに近いが……それでも語ろう。

白騎士事件後、ISは急激に世界の関心を集める事になる。宇宙進出の為だと思った奴が居るなら、そいつはよほどの阿呆だろう。

各国が注目したのは兵器としての利用性だった。そして各国の軍は、その技術を唯一持

つ日本へ——篠ノ乃束を捕獲しようとした。力づくで、だ。

日本もISで対抗しようとしていた。

それがIS暗黒時代。

各国が一触即発の中。突如現れたISが日本を始めとするIS、各国の兵器を七日ですべて破壊した。

ネットでの情報を鵜呑みにするのなら、この離れ業をしたのは”龍騎士”と呼ばれるIS

Sで、たった一振りの剣でこれをしたらしい。

荒唐無稽に思えるこの事件だが、ここで終わり無し。

その”龍騎士”の力を恐れた各国は、その後にある男が提案した条約に耳を貸した。

それが”アラスカ条約”。これにより各国からISの軍事利用の声は無くなり、宇宙ス

ーツとして、華々しくデビューするかと思ったが——

結局、宇宙進出は凍結され、競技と言う”戦争”に利用される事になった……

これがネットに乗ってる”龍騎士事件”の概要と結末。

根も葉もないこの話は、時代の裏とされた。

どこかの学者は論ずる。白騎士はISの力を示し、龍騎士は正義を示したんじゃないか？

こうも論じている。我々が、ISを人殺しの道具に使った時、彼

らはまた現れる。次は
”死”として。

このように、彼らの（彼女らの、か？ 仮面を着けてたらしく性別は不明）行動理由。

正体（彼らは新人類や神の使いなどと言うバカな例もあった）等と、様々な憶測が飛び交ったが、結局不明のまま、何年も過ぎた。

（そう、分からない。誰にもな）

真新しい参考書片手に、時世はうめく。

今呼んでたのは、なんてことないただの教科書。早急に取り寄せた代物で、暇つぶしに読んでいた。

（たく、千冬の奴。人をこき使いやがって）

胸中で今ここにいない人物を罵り。参考書を鞆に放り込む。

本日の業務を終え、ケータイの液晶に映し出された、待ち受け画面の上部にある時計を

確認する。午後四時二十分。恐らくもう初日の授業は終わっただろう。生徒を帰した教師

たちは残業するか、飲みに行くメンバーを誘ってる頃だろう。

そんな憩いの集いに誘われなくなって久しいが、それも自分が望んだ事だ。元々、酒は

あまり好きでない。

椅子を反らせながら、用務員にあてられたオフィスを見渡す。

気付いたが、どうやら自分以外は全員帰ってるらしい。普段、結婚しろと小うるさいこ

の部屋の主も、今日は珍しく居ない。奥さんの所へ帰ったか。

時世は背伸びをし、これからを考える。

なんてことない、帰って寝るだけだ。

彼は腰を上げて、上着を着る。まだ、夜は寒い。

ドアノブに手を掛ける。が、すぐに放す。はあ、と息を吐きながら、ドアに向かつて告げる。

「何しに来た？ 束」

その問いに答えずに、ドアが開く。うさ耳の何かが時世の胸に飛び込む。

「やつほー！ トツキー、お久しぶりぶりー！」

彼女に押し倒される形で、時世は地面に寝っころがる。これはかなり寂しかったよー、という合図だ。彼女は、寂しいの度合いで抱きついてくる時の強さが違う。これは上から二番目だ。

「さて、もう一度聞くが、何しに来た」

「やだなー、何言ってるのさトツキー。そんなの、愛しの束さんが会いに来てるんだよ。理由なんていらないじゃん」

「あーそう」

後ろ頭をさすりながら、胸に顔を埋める束を見る。相変わらずだ。

コイツは……

文句の一つでも言おうかと思ったが、無駄だと悟り、吐き出しかけた言葉を呑み込んだ。

ふと、時世は一つの可能性が浮かんた。

「妹の祝いか？ 悪いが俺はあいつの部屋を知らないぞ」

「それは先に行ったー。でもお楽しみ中だったから、合わないで帰って来たんだ」

「は？ お楽しみ中？」

時世は疑問符を浮かべ、そしてすぐに顔が赤く染まる。束はその様子を見て、ニヤニヤしている。束は時世の耳元へ顔を近づける。

「なんなら……私達も……楽しんじゃう？」

囁きと共に、束の吐息が当たり、心音が高鳴る。時世は言葉を紡げずに、ただ混乱した。情報処理が追いつかない。

そしてようやく、時世は落ち着き、束を離す。

「そういう冗談はやめい」

立ち上がり、顔を合わさず述べる。

「……ぶー、冗談じゃないのに」

「は、何か言ったか？」

「何でもないよーだ」

ふてくされた様な、束の声。

「それじゃあ、鈍感なトツキー君、束さんは忙しいので、またねー」

そう言って、束はオフィスの窓から飛び降り――いつの間に用意してたのか――ニ

ンジンの様な小型エンジン搭載のジェット機にまたがり消えた。
時世は眩く。

「……相変わらずだな。アイツは」

私達も……楽しんでやう？（後書き）

……ちょっと、束さんのキャラ、壊れちゃったかな。
もし不快でしたらごめんなさい。

そんな事になる訳無えだろ（前書き）

おひさしぶりですー

ISの設定に困りまくってる暗傍黒荏でーす
色々迷っちゃって、どうしよー

梅雨終わらないかなあ

そんな事になる訳無えだろ

IS学園のレクリエーションエリアに建造された、剣道場に竹刀の音が響く。

IS学園はISの一種の研究施設でもある。このレクリエーションエリアもその一環で搭乗者の身体能力、技能がどのように反映されるのかを数値化にして調べる為の実験場の意味合いも兼ねていた。

「あれは勝てんな」

比較的、広い部類に入るだろう道場の中で見知った二人が試合をしている。一人は束の妹。もう一人も見知った顔、というかつい最近まで一緒に暮らしてた弟分。一夏が竹刀を握ってた。

「ああ。まったく我が弟ながら情けない」

「まあ、家事に没頭してればそうなるな」

隣でうめく千冬に、時世は相槌を打つ。

変わらず、一夏は押されっぱなしだった。相手の攻撃を成すすべなく受け続けている。

篠ノ乃箒。時世がその名を思い出すには、少々時間が掛かった。

篠ノ乃束の妹である彼

女とは何度か会った事がある筈だが、時世は憶えてなかった。

見事な真っすぐの剣閃が一夏の脳天に当たる。

彼女の剣は確かに、今まで見た事のある剣を使うIS乗り達の中
でも際立っていた。

剣の腕では、おそらく彼女に勝てる人材は中々いないだろう。

（だが、ISでの戦闘では……？）

答えはノー、だ。剣道とISは違う。武器を使う所は似てるだろ
うが、根本的に違う。

IS使いの強さとは、腕っ節で決まる訳ではない。個人的な技能。
身体能力。その場の
判断能力。そして知識。と様々な能力に問われる。ましてや、千冬
の話聞く限りでは、

相手は代表候補生。国のIS使い達の代表の候補。

アラスカ条約締結後、ISはスポーツ部門としても転用され、凌
ぎを削り高性能ISを
開発し、それに優秀なIS使いを乗せ、スポーツとして戦わせる。

軍事転用と宇宙開発が

凍結されたISはスポーツ部門のあらたな種目として広まった。

そしてその国を代表して戦うIS使い達の候補となる者を代表候
補生と呼ぶ。

普通のIS使いとの違いは明確で、その特徴は専用機を持つとい
う事である。専用機は

国、企業に所属する優秀なIS使いに提供される機体。性能は現存
する量産型と一線を敷

く程で、世界中のIS使いのあこがれでもある。

が、その実体はただのモルモットである事は、本人よりも時世の
方が分かっていた。

物思いを中断し、時世はふと千冬に聞いた。

「なあ、千冬。あいつらここ数日剣道しかやってない気がすんだが」

「……ああ、そうだ」

「身体能力を上げるのは結構だが、肝心の知識は大丈夫なのかあいつ」

その問いに千冬は答えなかった。

時世も聞くのを止め、再び道場の中を見つめる。本日何回目かの面の音が小気味良く響いた。

隣の千冬の嘆息の音もよく聞こえた。

春風が吹き向ける草原。学園の敷地内の広場で時世はげんなりしていた。

右手の携帯端末に溜められたメールの量。それに眼を向ける度にはあ、と息を漏らす。

送り主に大体の心当たりはあった。自分のアドレスを知る人間は数少ない。

それこそ、片手で足りてしまう程に。時世は意を決して、携帯の画面を開く。案の定、

束だ。それと——これもいつもの事だ——I S 国際委員会。

時世は、後者を消し、束のメールを開く。どうせ、あれだろう。

日付順に読んでいく。

「やつほー！ トッキー。束さんだよー。私がいなくて寂しい？

寂しいよね？ もー、

甘えん坊さんだなー。私が居ないからって、ちーちゃんに浮気しちゃあだめだよー。何だ

かんだでちーちゃんに甘いんだからねー。それじゃあねー」

「トツキー、トツキー、トツキー!! 私は今、―――に居まーす。そっちはどー? 束

さんは元気いっぱいだよー。 あ、そうだ。焰神は調子どおー?

また今度来た来たとき
には調整してあげるからねー」

「トツキー! あかねー……………」

画面を消す。

定例報告の様なメールを読むのを止め、時世は寝っ転がる。
今日の雲は、八重に重なってる。この時期には珍しい形だ。

「本当にいい天気ですねー」

空模様と共に、隣から発せられた声が脳内フォルダに保存された。
本来ならはっ倒したいところだが、その声の主に覚えがあったの
で思いとどまる。

ああ、そうだ。この女は敵に回すと面倒だ。

「あれ? 先生。どうしたんですか?」

「何でお前がここにいる」

時世は、事も無し気にそこにいる生徒会長。更識楯無に半眼で問
う。

「先生ももうすぐ弟さんの試合でしょう。行かなくていいんですか」

隣に腰を下ろし、空を見上げる。

神出鬼没の彼女はいつも現れては隣に居座る。何が理由かは知らないが。どうせロクな

事で無いのだろう。時世は訊ねなかった。

「どうでもいいからパス。それにあいつに俺の存在を知られたくない」

「なんでですか？」

「うるせえんだ。あいつ、俺の食い方に」

「……ああ、そう言えばかなりの偏食でしたよね。先生」

呆れたように呟く楯無。

「ンだよ。その顔」

「べつにー」

「その言い方、腹立つからやめろ。あと、俺の髪いじるのやめろ」

えーだってー。と言いながらも、寝ている時世の髪をいじる楯無。うなじの辺りまで伸びてる髪は、手入れもロクにしてない癖に、何故か質が良いらしくよく癖が付く。

楯無はそのくせ毛の部分を弄っている。楽しそうな顔をしてるので強く言えなく、そのまま自由にさせている。

まったく、おちよくつとんのかこいつは！

「フフ、先生の髪相変わらずくせっ毛ですねー」

「あのな。俺は先生じゃなくてただの用務員だぞ」

「だって教員免許持ってるでしょ」

「とっくの昔に失効されて無えよそんなモン」

嘘だが、まあ別に変らないだろう。どこに置いてあるのか分からないのだから。

教員だったのは、千冬達が卒業するまでの間だけだ。それを何故、楯無が知るのか。彼女の正体を知る時世にはそんなに気にする事ではない。

「あーあ、先生が先生だった頃に学生だったらよかったのになー」

「わけのわからん事抜かしてないでさっさとどっか行け。ひよつとしたらお前の肩書きが危ない事になるかもな。学園最強」

「それはそれで面白そうだね」

おどけるようにそう言い、楯無は立ちあがる。
そして付けくわえる。

「織斑君がそうになったら、次は先生と戦うのかな。世界で唯一ISを動かせる男対世界で唯一のISを使える唯一の男。見てみたいかも」

(食えないやつだ)

舌打ちし、胸中で呟きながら微笑を浮かべてる楯無を睨む。
が、そこにはもう、彼女の姿は無かった。
興が冷め、時世も立ち上がる。

「そんな事になる訳ねえだろ。あほ」

遠くから歓声が聞こえる。

それが意味するのは試合の開始なのか、終了なのか、そんなのどうでもいい。

時世は何処ともなく歩き出した。とりあえず、結果ぐらいは知りたい。

そんな事になる訳無えだろ（後書き）

楯無さんって、こんな感じだったけなあ。という感じで書いてます。

踊りなさい（前書き）

白式の型番は適当にサイコロ転がして決めました。

祝、トランスフォーマー3公開決定！！

やったよー！！　今回は、あの三半規管にくるあの画面のブレの激しさをどうにかしてほしい。ゲームボーイのゼクロス並みの集中力が必要ってどういう事だろう？

踊りなさい

織斑一夏は目の前のモノに見とれてしまった。
言葉が出ない。隣にいる箒も一言も発さない。一夏はただ見つめる。

その視線の先に存在するのは白いIS。自分の為に作られた専用IS。名は……

「それがお前のIS。白式だ」

千冬姉がこの機体の名を告げる。

一夏は静かに白式に触れる。刹那――

認証確認――織斑一夏――機体名IS4型――NEO11
9――白式

確認完了――第一仕様に移行します――

流れてくる情報。同時にナニカが身体の中に繋がる。世界が変わる。

「？ 一夏、どうした」

「なんでもない。大丈夫だ」

箒にそう告げ、一夏は白式を見上げる。

白い機人は、何も語らず、黙したまま自分を待っている。まるで、命令を待つ騎士の様に。

「さあ、早く纏え」

ISの装甲が、煩わしい滑らかな材質のダイブスーツの様なISスーツの上に纏われる。

意外にも重さは感じない。

（うわっ。すげえ軽い。前に着た量産機より軽い）

「織斑。早くカタパルトに乗れ」

千冬姉の声が、白式の通信機能から聞こえる。一夏は了解し、カタパルトへ向かう。
ふと、箒の方へ向く。

「箒」

「な、なんだ」

「行って来る」

「ああ、勝って来い」

幼馴染の激励に应えるために、この勝負勝つ。一夏と白式は飛び立った。

数機のモニターに映し出されてる画面の内の、一際大きい画面を見上げ、適当な椅子

に座ってるのは、首のうなじの辺りまでくせのある黒髪を伸ばした、背は普通の痩身の男

性。別段、特に変わった特徴のない、普通の男にも見えない事もない。はつきりとそうさ

せない理由は、彼のそのやぶらみな目つきと、首から下げてる円形ダイヤをはめたペンダントがあつてこそだろう。

モニターで操作してるのは、メガネを掛けた小柄の女性。実年齢より幼く見えてしまう

のは、妙に子供っぽいその性格のせいなのかと時世は一時期思ったが、そのうちどうでもよくなった。

山田麻耶は目の前の画面を睨みながら一夏に情報を伝える。

「織斑君。織斑君が相手する機体はブルーティーズ。遠距離射撃に特化した機体です」

そんな麻耶を一瞥し、時世は隣に突っ立ってる吊り目の黒髪の女性。千冬へ顔だけを向ける。

「どうだ、一夏は勝てそうか」

「取りあえず、無理だろうな」

「嘘つけブラコン。どうせ期待してんだろ」

「お前に言われたくない！ お前だって他の用務員との賭けで一夏

に賭けてるんだろ。貴様も十分ブラコンだ！」

答えず、時世は画面へ向きなおす。

頬杖をつきながら、時世は見上げるのは白い機人。弟分が纏ったIS。ビジョンに表示

されてる名を見ると、名は白式。

白式が相對するは、蒼い機体ブルーティアーズ。両者はいくつか言葉を交わし——お

そらくハンの申し出だろう——動きだした。

先に動いたのは白式。拳を振り上げ突っ込んでいく。

（武器を使うという頭は無いのか。あの馬鹿は）

ゲームでも同じような事をしてたっけな。そんな事を思い返しながら相手の射撃で吹き飛ばされる一夏に、ため息が漏れた。

「さあ、踊りなさい。私の、セシリア・オルゴットの奏でるワルツに！」

「くそっ」

吐き捨てながら、セシリアの射撃をかわす。あのでかい銃だけならまだしも、あのビッ

トの所為で思うように近づけない。一夏は己のISに問いかける。

「何か武器は無いのか」

一夏は叫ぶ。すると表示が出される。

——片刃式刀型近接ブレード——装備展開可能

「これだけか。けど、ないよりはマシだけだな」

IS越しから感じられる、刀の重み、前に一度だけ握った事のあの感触と重み。

一夏は刀を振り、ビットからのビームを弾く。上昇する。

『はあ！？ 勝つにはどうすればいいかだって』

一夏の脳裏に時世の声が閃く。

昔、時兄に質問した事がある。剣道を始めたばかりで誰にも勝てなかった時期だ。

全然勝てなくて、千冬姉の顔に泥を塗るみたいで、それが嫌で、勝ちたくて時兄に聞いた。

た。その頃時兄は、いや、その頃から時兄は人を寄せ付けなかった。そして誰も寄ろうと

もしなかった。自分の姉と束さん以外は。

その理由はまだ幼い一夏には分からなかった。知ろうとも思わなかった。ただ、一夏の

眼には孤高の強さを持った、千冬姉より強い存在に映った。同時に少し苦手でもあった。

だからか、聞くのに躊躇した。

意を決して聞いた。強くなるにはどうするか。返ってきた答えは

……

『イカサマすればいいだろ。弱点つけば楽に勝てるだろ』

(イカサマか、時兄らしいや)

苦笑を浮かべ、一夏は刀型の武器を持ち直す。白式の反応に慣れてきた一夏は、ハイパ

ーセンサーが捉えるビームの反応に即座に対応する。

死角からの一撃を剣で打ち消す。一夏は声を上げる。左手を閉じたり開いたりしながら

「分かったぜ。このビットからの攻撃はお前が命令を出さないと攻撃しない。しかもその間、集中するからそれ以外の攻撃が出来ない」

また死角から放たれたビームを避け、近づいてビットを一つ破壊して一夏は宣言する。

「俺の勝ちだぜ」

刀の切っ先を向け、自信高らかに宣言する一夏が大型スクリーンに展開される。

が、時世と千冬が見つめてるのは違っていた。ある一点。彼の左手の動作を見つめてる。

画面を見つめてる麻耶が感嘆の声を上げる。

「すごいですね、織斑君。IS起動が二度目とは思えない」

そんな麻耶に、時世はぼそりと呟く。

「麻耶、一応言っとくがあれば別に根拠があって言ってるんじゃないぞ」

「ああ、単に調子に乗ってるだけだ」

「ええ！？　そうなんですか先生」

「あれ、見てみる」

時世が指差す先に見えるのは、アップにされた一夏の左手。開けたり開いたりしてる。

時世は付け加える。

「あれはな、あいつの癖で、調子に乗ってる証拠だ」

「しかもあれをやると、必ずミスする」

「はあ、お二人はくわしいですね。あれ？　織斑先生は分かりますけどなんで先生がしてるんです？　まさか……」

ぼわっと、オーラを溢れ出す麻耶にたじろぐ時世。こんな奴だったろうか？　少なくとも

も、ここまでの殺気を放てる様な奴じゃ無かった筈だが。隣の千冬が勝ち誇ったような微

笑を浮かべてるのが、ちらっと見えた気がしたが、無視して説明す

る。振り向いてないが
どんな表情を浮かべてるのか知りたくない。

「何誤解してるか知らんが、千冬とあいつは俺の家に居候してたんだ。事情は言えんが、
少なくともお前が考えてる様な事じゃない」

それでも麻耶は聞かず、うう、織斑先輩ずるい、とかなんとか聞こえたが無視して、画面へ目を向ける。

そろそろ決着がつく頃だろう。

接近戦に持ち込む。

胸中で必勝の術を浮かべる。頭には相手の懐に突っ込むイメージとその術を思い浮かべ

一夏はセシリアへ刀の剣戟をあてる為の動きをする。

予想通り。死角からビットが放たれてる。そしてその間セシリアは動かない。ビットか

らの攻撃は死角へ来るとわかってるなら、そこに注意を払えばいい。あとは上手くかわしながら前進する。

一夏はビットの攻撃を刀と白式の高機動能力を使い、ビットを捌いていく。

一夏は刀型近接ブレードを大上段に——片手で——振り上げ、距離を詰めていく。

刹那——

「かかりましたね」

その声が鼓膜に響いたと同時に、背後に気配。
とっさに身を翻し、向かって来るビームを弾く。が、

「それで終わりではありませんわよ」

ブルーティアーズの腰部分から出てきた、残りの2門のビットが
展開される。実弾が発
射される。

回避が間に合わず。一夏はそれを受けた。

「一夏！」

箒は叫ぶ。自分の思い人の身を案じ。硝煙に包まれ、一夏の姿が
見えない。

長い髪を纏めたポニーテールの髪が特徴の少女は、不安げに一夏
のを案じる。

ISは絶対防御と呼ばれる、最強の防御壁に守られてる。だから
死ぬことは無いだろう

が、かなりのダメージを受ければ搭乗者は気絶することだってある。
まさか一夏は……

箒はかぶり振ってその可能性を振り払う。

おそろおそろ、画面へ視線を戻す。硝煙が晴れる。そこには、先
ほどまでの白いISと

形の違う白いISに乗った一夏が佇んでいた。

「機体に救われたな、バカが」

「お前、ほんとに弟にも容赦ないよな。まあ、どうでもいいけど」

画面に映し出されてるのは、真白い機体。そう、アレが白式の真の姿。

ISは一次移行という、搭乗者の情報に機体の能力を会わせる工程を経て、完全な状態になる。白式は今、その工程を終え、完全に一夏の専用機になったという事だ。

完全な姿を得た、白式と一夏を見、時世は眩く。

「これで決まるな」

「雪片式型……？」

その名に、聞き覚えが無かったわけじゃない。そうだ、千冬姉が使ってたISの武器の名だ！

強さを極めた、姉の武器。
ふと、笑みがこぼれる。

「な、何ですか？」

セシリアが怪訝そうに見つめてる。
が、構わず一夏は声を上げた。まずは姉への感謝を。

「俺は世界一良い姉さんを持ったよ。けど」

そして次は、決意を。

「もう、時兄や千冬姉に守られるだけでも終わりだ。これからは俺が――」

静かに目を閉じる。瞼の裏に映る、常に凜々しく、自分を、守ってくれた姉。そして、

「俺も、家族を支えて行く！」

瘦身の背中。決して大きくない筈のその背中は、いつも、何も語らずに、黙したまま、自分と姉を守っていた。悪態ばかりつく、人嫌いな――滅多に他人に気を許さない兄。

目を開けて、兄達の幻影が消える。かわりに映るのはセシリア。雪片を構え、天を翔ける。

セシリアのビット、大型レーザーから放たれる無数のビームを、雪片で打ち消す。

一夏は雪片を振り下ろす。

その刹那――

終了のホイッスルが響く。刀は、セシリアに当たる一歩手前で止まった。

「へ？」

一夏は、ただ訳分からずにうめいた。

「……終わったな」

「ああ」

と、こめかみ抑えながら、千冬。あまりにも間抜けな内容に呆れたのか——まあ自分もだが——渋面に顔をにじませる。

試合結果は、白式のエネルギー切れによる負け。

これ以上に無い、間抜けな結果だ。すこし腹が立つが、千冬のこの後の拷問を考えると

どうでもよくなる。

時世は溜息交じりに、ぼそりとうめく。

「取りあえず、一夏の今後の課題はISの知識と効率の良い戦い方だな」

その方針に、そうですねと、麻耶だけ答えた。

踊りなさい（後書き）

どうでもいいけど、セシリアの銃で思いっきり相手をぶん殴ったら
どうなるんだろう？

もしくは。レイジングハートみたいなレーザー砲と、スターライト
ブレイカーみたいな技があったら、ひよっとしてセシリア最強？

龍騎士は見つかったか（前書き）

すみません。第七話が少し気に入らない部分があったので書きなおさせていただきました。本当にすみません

龍騎士は見つかったか

「時世。起きろ」

「うっせえ」

寝惚け混じりのその声を聞きながら、千冬は嘆息した。

腰に手を当て、眼下にはベッドの中で規則正しい寝息を立てる男。身体全体をズッポリ

ベッドへ埋めてるせいで、見えるのはくせの残った黒髪。顔は見えない。

IS学園の用務員用の個室は、教師のそれよりやはり狭いが、それでも一人分には十分

の広さはある。時世の部屋は、部屋の面積が本棚に取られてる為、狭い。壁際には様々な

ジャンルの本が所狭しと並んでる。持ち主の性格が出ており、整理されてなく、バラバラ

だ。ベッドの脇——つまりは千冬の足元——にも、積み重なった大量の本。

近くには、服が床に散逸している。その中に下着が無い所を見ると、コイツ。風呂に入

らないで寝たな。

「まったく……その不精どうにかならんのか」

一向に起きる気配は無い。

意外に寝つきのいいこの男は、一度寝ると中々起きない。特に仕事してない癖に、何故

こんなに深い眠りにつけるのか、疑問に思ったが、無視する。

千冬は揺さぶってみる。

「起きろ、時世。まったく——起きろ！」

怒鳴る。が、効果は無い。千冬は嘆息し、近づいてシーツを——頭の所を——取る。

安らかに眠る時世の顔。あまり近くで見た事無かったが、よく見ると髭一つ生えてない

斜目に近い眼つきも、今は無い。素直そうな、純朴な青年に見える。

（こいつ……こんな寝顔していたんだな）

顔にかかっている長めの髪を避け、じっと見つめる。

「……………時世」

顔を近づける。ゆっくりと、静かに——

眼を閉じる。何故、こういう時誰も眼を閉じてしまうのか。疑問を感じるが、おそらく

一生答えは出ないだろう。世の中、謎のままにしておいた方がいいモノもある。

千冬は思考を振り切り、顔を——近づける

……………

普段この部屋にある筈の無い、誰かの居る気配を感じ、時世は瞳を開ける。この気配は

千冬か。時世は瞼を擦り、千冬の姿を確認する。何やらそっぽを向

いてる。時世は怪訝そうに問いかける。

「聞きたい事は多々あるが。まあ、取りあえず。何してんだお前」

「何もしてない！」

声を荒げ、そう言う彼女に気押され、身を引きながら尻つぼみにうめく。

「そ、そうか。な、ならいいが……」

今気づいたが、日光の光がカーテンの隙間から溢れてる。この部屋には、日中にしか日が射さない。今は昼頃らしい。丁度腹も空いて来た。

「何しに来たんだ？」

「何しに来た。だと……」

わなわな震え、千冬は凄まじい形相で時世を睨む。

「起こしに来てくれと言ったのはお前だろうが！」

「あー、そう言えばそうだったな」

「そうだったんじゃない。時世、ささっと着替えろ」

着替えを時世に投げつける。顔にばすつ、と当たる。

今日は、IS学園の休日。時世はぼんやりと眠気の残った頭で、

静かに悟った。どうでもいい事が起こりそうだ。

円卓。そんな高尚なものじゃないが、言い表すならそんな感じだった。時世はその円形状の机で出来た円卓の中央——つまり、囲まれているということだ。そこに立ちながらこれから始まる事に適当に見当を付ける。なんてことない、ただの尋問だ。そう思えば、ここは裁判場の方が近い。屁理屈だけごねて表面上だけ味方ぶって金をせしめる偽善者の弁護士も、罪を重くしようと奔走する刑事たちを顎で使って、自分は何もしない検事が居ないだけ、こっちの方がマシに思える。敵も味方も分かりやすい。自分だけなのだから。

IS委員査問会。事実、世界の兵器を管理する俗物どもによって行われるのは。どうでもいいことだという事は分かっている。

「龍騎士は見つかったか」

そんな事でまた呼んだのか。喉元まで出なかったその言葉は、胃の中へ押し戻す。生温かいイヤな感触を無視して、顔にも出さない様に告げる。

「いえ。貴方達も知っているでしょう。龍騎士はあの事件以来消えたのを。そして、その後アレは現れてない事を」

「ああ、そうだ。そして君はその行方を知る事の出来る唯一の存在だという事も」

誘導尋問か。どこから発してるのか分からないその声の主に毒づく。別々の声だが、一つの生き物のように考えがまとまってるこの男達は、本当に一つなのではないか？ そんな疑問が浮かぶが残念だがそんな事は無い。

（人間じゃなかったらこの場で殺せるんだがな）

ふと自分の格好を思い返す。黒のスーツ。千冬から借りたものだ。自分のは無い。その下に首から下げてる首飾りの存在を思い出す。甘い警備だ。この程度でここにいる奴らは安心しきっているのだ。このISも探知出来ない程度の警備でだ。

「何を言うのです。私と龍騎士はおろか篠ノ乃東とだって接点ないですよ。そんな私がないを知っているというのです」

「少なくとも、性別を知ってるだろう」

「あんた達もでしょう」

「……………」

沈黙。灯一つ以外無いこの部屋での沈黙は、ただ胸糞悪いだけだ。時世は見えない闇を

睨む。俺の敵はこいつらかもな。

時世は言葉を待つ。基本ここでは召喚された者は発言権は許されない。逆らえば反逆罪になり、ヘタしたら国家追放だ。

「ふん。引き続き。龍騎士の情報があつたら報告するように。それがIS学園設立時の君とかわした契約だ」

「ええ、憶えてますよ。その時に私が手に入れた白騎士の機体データを渡したのも」

ああ、そうだ。憶えてる。貴様らが眼の色変えて、やるべき事もないで、ISを求めた時の事をな、

歯を軋ませる。憎たらしい老人共の声は一向にやまない。どうせ同じ事を考えてるのだからひとりでこいつてんだ、そうすればもっと簡単に話は済む。胸倉掴んで壁に叩きつけて気を失わせる。あとはとぼける。誰も咎めはしないだろう。確固たる証拠など出させないのだから。

どうでもいい現実逃避をしながら。時が過ぎるのを切に願った。

「終わったようだな」

迎えるつもりなのか、千冬は車へ寄り掛かりながらこちらを見る。随分待ったのか、少

々不機嫌な感じだ。

時世は手ぶりをする。特に意味は無い。別に恋人同士でも無いからな。

「よお。待たせたな」

「ああ、まったくだ」

可愛げのない奴だ。こんなでこいつは教師やっていけるのか、この女は……と時世は思う。まあ、どうでもいいことだ。査問会よりはマシなだけ、まだいい。

「乗れ。送っていくぞ」

「ハナからそのつもりだ」

悪態をつきながら、車へ乗り込む。シートに座ると、車が発進される。窓を眺めると千冬が聞いてくる。

「結局。何の用で呼ばれたんだ」

それは何の皮肉だろうか。時世は頬杖ついて泥を混ぜるように告げる。

「龍騎士は何処だ。だよ。まったく」

「人気者はつらいな。なあ”龍騎士”」

「お前もか」

半眼で運転する千冬を睨む。微笑を浮かべている。
千冬は続ける。

「いや、” 龍神 ” と言った方がいいか」

「好きにしろよ」

視線を窓の外へ移す。時世は付け加える。

「龍神はもう、どこにもねえけどな」

「そうだな」

車窓から見える景色はすでに、IS学園からも見える景色に変わっていた。この調子だともうすぐ学園へ着くだろう。今日は本当にどうでもいい事だらけだ。だから帰ったら寝よう。

「時世」

「あん」

「帰ったら、書類が待ってるぞ。転入生の書類に目を通して貰う」

どうやら、まだ彼の一日は終わらないらしい。本気である老人達を皆殺しにした方が良かったかもしれない。そうすれば、少なくとも今よりは気分がよか

ったかもしれない。

時世はシートを倒して天を仰ぎながら、どうでもいい後悔をした。

は、マジかよ(前書き)

今回は短いです。

は、マジかよ

部屋に戻ってまず始めにした事は着替え。黒のスーツからいつもの用務員用の服装。別

段服を変えなくともよかったのだが、少しぐらいはサボりたい。転入生への腹いせをどう

するか。計画を練りながら着替え終える。

借り物の黒のスーツを袋に詰め、扉を開ける。女子寮にある時世の部屋の付近は、あま

り人が通らない。間が悪いのか、違うのか分からないが、気にするようなことではない。

廊下を歩きながら、時世は腕時計を覗く。時刻は5時を指している。書類仕事を終えれ

ば丁度良い時間だろう。帰りに千冬か麻耶を飯に誘えばたかれるだろう。話をするのが面倒だが。

事務員用のオフィスに入り、自分のデスクを見る。上には普段見ない書類が乗っている

校長職と講師職を辞任してから3年。いまだにこういった案件が回ってくる。時世は書類に手を伸ばす。

そこに書かれてる筆記を読む。中国の代表候補生であるらしく、学園の内情を探るスパ

イなのかどうか決めかねているというのが現在の状況といったところであるらしく。そこ

で、元校長の自分に判断を仰ぎたい、とこうして回ってきた。だが、もし本当にスパイだ

としたらあからさま過ぎる。こんな時期に送り込むだろうか？ 現在の校長もバカではな

い。そんなことには気づいてるだろうが。仕方ない。何せ今年はアレがあるのだから。時

世は元凶たる自分の弟分の姿を思い浮かべた。溜息をつく。

さてどうしたものか。書類の項目を読んで行く。特に変わった所もない。わざと乗って

監視でも付けさせるか、この……

そこで時世ははっとする。名前を見てなかった。

舌打ちをして名前の欄を覗いて、思わずうめく。

「は？ マジかよ」

確認して、顔写真の方にも目を向ける。そこには見覚えのある顔。時世はさきほどのと

は別の溜息をつく。やはりあの一家は女殺しの一族の様だ。

時世は書類の欄へ「問題無し」と記入して、陰鬱にペンをゴミ箱へ投げた。インク切れ

だ。どうでもいいことだらけだ。

時刻を確認する。6時だ。今日はこの後、飯を食べに行ってもいいな。時世は事務員の

オフィスを後にして、ひと気のない廊下を再び歩く。事務員室の付近には生徒たちはあま

り寄らない。あまりそこに生徒は用が無いというのも理由の一つだが、あるうわさの方が

が原因らしい。

なんでも事務室には、昔生徒を恐怖に叩きこんだ魔王とあだ名される教師がいて、そのあ

まりのひどさに事務員に降格された。そしてその後、事務室の前で物音一つ立てると、魔

王が現れて世にも恐ろしい拷問をするという。

馬鹿馬鹿しい。魔王じゃ無くても、事務室前でISを展開してれ

ば怒鳴るし。しかも正

座と掃除をさせたただけだ。まあ、拳骨を喰らわせてやった気もしなくともないが……

食堂の前に来て、中を覗いてみる。一夏が居て、見つかったら厄介だ。特にこの時間帯は。

どうやらまだ来てないらしい。早足で食券を買いに行く。

そばを一つ頼んで、席に着いて、そばを口に入れながらふと思う。今日も何ら変わりな

く休日を終えようとしている。時々開く査問会も、書類案件もあったが、取りあえずは……

……部屋に帰って――――

「あ」

箸を置いて思い出す。そうだ、転入生への八つ当たりを考えてなかった。取りあえず、

一夏とは別の教室にでもしておこう。

時世は残ったそばのつゆを飲みながら、どこの教室にするか思案した。

は、マジかよ（後書き）

ネタばれコーナー！

前回でた龍騎士の正式名称。龍神。これは元ネタはトランスフォーマーのコンボイの声優をやった人が他の作品でやってた役です。わかるかな？

君、意外とお人好しだろ？（前書き）

ISを見ると、トリガーハートを思い出す暗傍黒荏です。

最近湿気がすごいせいで、イラつく。

そう言えば、トランスフォーマーのマスターピース。新しいのが出るんですってね。

ちなみに私は新発売のクロニクル（九月ごろ発売）を買う予定です。

君、意外とお人好しだろ？

織斑一夏の一日は起床から始まる。だるく思いながら未練がましくベッドからでて、洗

面所で顔を洗う（その際に箒の着替えを見てしまうなどのひと悶着があるが……）トイレ

を済まし、運が良ければ（ハプニングが無ければ）箒と一緒に食堂へ向かう。が、今日は

悪い方だった。

先ほど、うっかり着替えを見てしまったのだ。己の間の悪さを呪いながら、しぶしぶ、箒の後を追う形で食堂へ向かう。

IS学園の食堂は、さすが全寮制の学園だからかなりの広さを誇っている。メニュー

も豊富であり、しかもバランスも取れている。食券で魚中心のAランチを頼み、トレイを

受け取り、ルームメイトのいる所を探す。箒はいつも自分以外とは食事は取らないので、

見つけるのは簡単だった。集団で食事をとってるのがほとんどなので（自分以外は女だから）箒の様に一人で食事をとってるのは目立つ。今回もそれで見つ

けた。

何とかご機嫌を取りつつ、食事をとる。まだ早朝だというのにひどく疲れたので、いつもよりうまく感じる。

そう言えば時兄はまともなものを食べてるだろうか。ほっとくとあの兄は偏った食事し

かしないのが悩みだ。まあ、ジャンクフードの類を食べないのが唯一の救いだが。

「そうだ、一夏。聞いていいか」

いきなりの箸の質問に、一夏は箸を止める。めずらしい事もあるものだ。食事中はあまり話さない箸が聞いてくるとは。思ったが、よく見るともうすでに食事を終えている。

箸を止める。

「ん、なんだよ。箸」

「時世さんはどうしてるんだ？」

意外だった。いや、そうでもないかもしれない。とにかく箸の口から時兄の話題が出る
とは思わなかった。一夏は少し間をおいて答える。

「時兄は変わらないよ。いつも何考えてるか分かんないよ。相変わらず。何やってるのかも話さないし」

「結婚はしたのか？」

「え？」

「え？　って、まだしてないのか？　千冬さんと」

「ちよっ、ちよっと待った。時兄と千冬姉？　そんな関係じゃないぞ、あの二人は。何言ってるんだ箸」

そう、あの二人はいつも何か言い合いするし、会うたびに皮肉を言い合う。とてもそんな仲とは思えない。一夏はあの二人が揃った時の事を思い浮かべる。

時兄が居ると、何故

か千冬姉は普段よりも喋る。内容は口げんかみたいなものだが。

まあ、そんなにひどい物ではない。せいぜい親子喧嘩か兄弟喧嘩みたいなものだ。と、

一夏は感じている。

むしろ、

「むしろ、束さんの方だろ。束さんは時兄の事好きだろ」

「お前、姉さんの事には気づいて、自分の姉の事には気づかないのか？」

「はあ？」

「まったく。お前と時世さんは、どうしてそういう変な所が似てるんだ」

「どういう意味だよ」

箒は答えず、呆れたように溜息をする。鈍感とか聞こえたが、結局、意味は分からなかった。

一夏は食事を再開しようと、箸へ手を伸ばす。

「あら、一夏さん。お隣宜しくて？」

いつの間にか、セシリアがトレイを持って近くにいた。

「ん、セシリアか。いいぞ別に」

そう言うのと、セシリアは一夏の隣へ座る。気のせいか、やっと機嫌を戻した筈の機嫌が

また悪くなった様な気がした。どうしたものかと、胸中で呟く。

女心というモノに、時兄と同等に一夏は鈍い。

「そういえば、一夏さん。御存知ですか？」

「ん、なにを？」

「この学園の噂ですわ」

「噂？」

初耳の事に、眼をぱちくりさせる。

「どんな噂だ？」

気になったのか、筈が一夏が思った事を代弁する。どうやら内容が気になって、不機嫌である事を忘れたらしい。

「はい、わたくしも最近知った事なんですけど。何でもこの学園には『魔王』とあだ名される人物がいるらしいのですわ」

「『魔王』？」

あまりにすつとんきょうな単語に、一夏はうめく。

何でもこの学園の用務員には、二人の人物がいる。まずは、『学園の良心』と呼ばれる

好々爺だが、実はかなりの権力者だと言われてるらしい。そしてもう一人。先ほどの人物

とは正反対の人物。それが『魔王』。この『魔王』は、かつて教師だったが、あまりの横

暴っぷりで、降格されて、それから用務員をしてるらしい。だから、魔王が用務員室に居

る時に、用務員室の前で話し声ひとつでも聞こえたら、魔王が体罰する。

「でも、それ噂だろ。そんな人間いたら首だろ」

箒もそうだなと頷く。

「いえ。何でもその魔王はこの学園の裏の最高権力者だと噂です。だから校長ももう一人の人物も、織斑先生も口出しできないだとか」

「え!?! 織斑先生ですら!?!」

箒が驚愕する。一夏も内心では同じだった。しかし、どこか腑に落ちない。

「どうかしましたか? 一夏さん」

「いや、何でもないよ」

手ぶりで誤魔化し、一夏はようやく朝食にありつく。すっかり飯は冷めていた。

織斑一夏の一日はこんな感じで始まった。

「で？　どうなのかね」

「なにが？」

ペンを動かしながら、視線は書類に向けている。

にやにやしなから、『学園の良心』と呼ばれる人物は、毎度のごとく朝会うたびに写真を出してくる。見合い写真だ。

写真に映し出されているのは、チラ見した程度だが、まあ、美人だろう。どうでもいい

が。黒髪黒目。少々貧相な体格で弱々しく感じるが、するどい目つきが、それを無しにしている。

だがその眼つきも、今は、何となしに苛立ちの色を浮かべてる。

『学園の良心』。温和そうな顔で轡木十蔵は、時世へ見合い写真を突き出す。

毎度のことながら、この御老体は何故か時世に見合いを勧める。

よくもまあ、そんなに見合いの女性を見つけるものだ。と疑問に思う。

そして時世は続けて、もう一つの疑問を口に出す。視線は書類に向けたまま。

「あんたはなんで俺に見合い写真を出す？」

「遺伝子を残さない人生は無価値だぞ」

「なら、無価値のままでもいいです。俺はあんたみたいにうざい愛妻家になりたくない」

「そうかね。意外に君は妻と子供とかに永遠に愛情を注ぐタイプだと思ったんだが。君、意外とお人好しだろ？」

その問いに答える必要を感じず、時世は実技科担当の教師からの報告書へ目を通す。

時世の肩書は用務員だが、非公式でIS戦闘技能の顧問でもある。その意見を求めている。報告書がこうして後を絶たない。

時世はその書類を処理済みの箱に入れた。実技をサボる生徒の急増についての報告書だった。（時世は余白に、織斑先生にそいつらを預けろ。それでもまたやったら俺の所へ連れて来い。と記入した）

続けて、ISの危険性についてまるで分かってない生徒がいる。と書かれた報告書（「半殺しにするか。わざと欠陥のISでも使わせてみる」。専用機が欲しいという生徒の急増の件（「見せしめに麻耶か千冬。いや、他の専用機持ちでもいい。そいつらと誰かを全校生徒の前で戦わせろ」）を投げる。その間も見合い話は続いた。

時世は胸中で毒づく。

（しつけーんだよ。くそじじい）

しかし、十蔵は気づく筈も無く、やけに食い下がってくる。

「まあ、わたしの顔を立てると思って」

「直立不動のその顔を今更どう立てろってんだ？」

皮肉を込めて十蔵へ——視線を書類から移して——吐き捨てる。
が、意に介さずに十蔵

は見合い写真を開き、写真の女性に指差す。もう覚えてはいなかったが、多分さっきの女性とは別人だ。いつの間に……

時世は溜息をつき、手を止めてから述べる。

「俺は見合いする気なんかねえよ。……この先も」

そう言って、時世は再び書類をやっつけにかかる。

十蔵は含みのある笑みを浮かべる。

「誰かいるのかね？」

やはり、その問いに答える必要を感じずに、時世は報告書に目を通す。

君、意外とお人好しだろ？（後書き）

感想待ってます。

メガトロンを何らかの形で出すか出さないか思案中。どうしよう？意見がありましたらお願いします。

もし出すとしたら個人的はマイクロン伝説のメガトロンが好きなのでそっちを出したいと思っています。

あと、ヒロインについても。メインヒロインは千冬、束、麻耶なんですけど、他にも加えたいんですけど、どうしたものか。ヒロインの意見がありましたら感想へお願いします。

私を自由に出来るのはあんた達じゃないよ（前書き）

主人公のISの装備をどうするか……ギャラクシーコンボイの装備でもいいし。ファイヤーコンボイの技も捨てがたい。マイ伝のコンボイもいいし……あ、でもグランドコンボイはパス。なーんて悩んでたら、この前のおもちゃショーで、今度の映画で出るオプティマスの装備武装バージョンを見つけて（もちろん購入）コレだ！とまあ、こんな感じで主人公のISはオプティマスモデルにした感じにしました。オプティマスかけー！

恋愛ベタな自分が憎い。

私を自由に出来るのはあんた達じゃないよ

らしくない。彼女は深い森林を疾走しながら、毒づいた。

その格好は一言で言うところ、アリス。不思議の国のアリスが着てる様な服を纏った、うさ

ぎ耳のカチューシャを付けた女性が余裕な表情で、跳んでいる。

彼女が履いてるのは、重力中和発生装置搭載の靴。それはISのPICを制作する際

におまけで作ったものだった。

IS制作者、篠ノ乃東は、どこかの国の（彼女はいちいちそんな事は憶えない）国境付

近だろうと思える、森林の中を追手から逃げていた。

重力中和してるので、身体は軽い。束は忍者のソレのように、時には、枝から枝へと跳

び。崖を飛び越えて逃げていた。

こういった事は慣れていた。自分がISを開発してからは、ほぼ毎日追われる毎日だ。

だが、彼女はそれを、恐ろしいと思ったことも無いし、別に気にしてるわけでもない。し

いて言えば、

（トツキーに気安く会いに行けないじゃないか）

とは言え、彼の方も監視が付いているだろう。それらをの眼をかくぐるのは、流石に

厄介だ。

何故なら、ある意味では彼の方が自分よりも目を付けられてるのだから。

束は思案する。今彼女を追っているのは、高機動型のIS二機。

自分が作った物に追われるというのも何とも皮肉だな。と、彼は言うだろう。あの思い人は。

初めて会った時から、誰に対しても皮肉を飛ばすあの人は、別に対抗手段が無いわけではない。ただ、あんなのに使いたくない。もったいないし。

それに……

束はにやりと、笑みを浮かべ疾走する。後ろを付いてきてる、どこかの国かわからない二機のISから完全に離れない様に。

「追いつめましたよ。篠ノ乃東博士」

「我らと共に来てください。そこくはあなた悪い様にはしません」

陳腐な場所で、陳腐なセリフを、まさか自分が言われるとは、流石の自称天才も思わなかった。

森林を抜けて、出たのは崖だった。高さは二十メートルほど。この靴でも流石に着地は無理だろう。そして自分に呼びかけてる二人のIS使いのうち、一人が自分に近づいてくる。手を差し出し、彼女は言う。

「国は、貴女が来るのを待っています」

「残念だけど」

余裕を崩さずに彼女は告げる。

「私を自由に出来るのはあんた達じゃないよ」

目を閉じる。諦観でも、絶望でも無い。ただ閉じただけ。

刹那――――

轟音が響いた。共に襲撃者の悲鳴が聞こえる。何が起きてるのか？ 愚問だ。彼女には分かってる。

そう、彼女が危なくなった時。必ずあらわれる守護者。彼が、無遠慮な襲撃者を罰しているのだ。

目を開いて――――まず目についたのは、やはり彼だった。赤いフォルムのISアーマーを纏った彼。それは焰を連想とさせる、ソレは、彼の凄絶な眼つきと合い混ざって、顕著とさせている。

その次に目に付いたのは、腕のアームから展開されたエネルギーを纏った鋭利なブレード。おそらくそれで足下の転がっているISの残骸の山を作ったのだろう。襲撃者達

は―――死んでないだろう、気絶している。

彼は顔だけをこちらへ向けた。やはり、めんどくさそうにしてる。そんな彼に束は訊く。

「もう手助けはしないんじゃないの？」

「忘れた」

ぶつきらぼうにそれだけ。彼は視線を横たわる襲撃者へ向け、告げる。

「ブースターとコアへは攻撃しないでおいた。まあ、何とかここから帰れるだろう。聞こ

えてないならべつにいいが——一応言っておく。もう二度と束を追うな。これは忠告だ今度は殺すかもしれん」

そう言って、彼は身体の向きを変え、彼女へ向きなおす。

「大丈夫か」

「えへへ。異常無し」

敬礼でもするように、手をかざす。彼はそんな束に嘆息を漏らす。

「とにかく、ここから離れるか」

束に近づき、抱きかかえるように持ち上げる。束は彼の首に手を回す。彼は慌てる。

「お、オイ」

しかし、彼女は聞かず、少し頬を染めた顔を彼へ近づける。彼も、気のせいか頬を染めている。が、夢心地の束は気づいてない。

やがて、宙へ浮く。彼は束を落とさない様に抱きかかえてる腕に力を入れる。結果、必然的に束を強く抱きしめる形になる。彼は平常心を保とうとする。束はその様子をいとおしそうに見つめる。

束は胸中で呟く。

「やっぱり、らしくないな。トツキーの顔が見たくなるなんて」

やっぱり姉妹だな。

意地っ張りで、さみしがりやな妹を思い返しながら。束は彼の顔を見つめる。

別段、人目を引くというわけではない。くせの付いた髪型に、鋭い目つき。チンピラに

近い風貌。

だけど彼は、そんな見かけとは裏腹にお節介焼きで、自分に厳しい。安心させてくれる

存在。そんな彼だから自分の幼馴染も彼に惹かれたのだろう。

だから守りたくなるし、甘えたくなる。

ぎゅっ

「? 束?」

「……充電中」

彼は何も言わなかった。ただ、飛んだ。

本当に、今日はらしくない。

私を自由に出来るのはあんた達じゃないよ（後書き）

……ヒロインはずっとミカエラでいて欲しかったけど。カーリーはそれはそれで、新たな魅力を引き出しそうだからいいや。

シャルに時世がお兄ちゃんと呼ばれてる妄想に浸ってる自分が居る。末期かな。

ちなみにまだヒロインのアンケートやってます。

千冬、束、麻耶のほかにヒロインを啜えて欲しかったら感想へ。待ってます。

バカ共が。俺の手を煩わせてんじゃねえよ（前書き）

やっと……やっと、だせた。

時世のIS。

バカ共が。俺の手を煩わせてんじゃねえよ

薄暗い地下室。

機械の山がひしめき合う空間で、時世はげんなりしながら天を仰ぐ。雰囲気が出るとい
う理由でこの部屋は暗くなっている。

時世は視線でこの部屋の主を探す。あまり広くない部屋なので、不在なのはすぐ分かった。

「たく、あいつ俺に何の用だよ」

周りに無造作に置かれた機械を見渡し、うめく。

何の用で呼んだかは知らない。昔からそうだ。よく俺を巻き込む。時世は嘆息して、誰もいない部屋を探索する。この部屋はとりあえず退屈する事は無い
相変わらず、いろんなものが散逸している。時世は束がいつも作業をしている机まで近づく。

と、その時。

机に積まれたガラクタの山の中を、掻きわけるように。拳大ほどの球形機械が目につく
チカチカ、と発光を繰り返している。まるで、自分と呼んでるかのように。

無意識に手が伸びる。

時世はその球形の機械に触れる。

刹那――――

起動確認――――マスター認証します――――ISコア、シリア

ルナンバー000

マトリクス———起動

黒い塊と白い塊が、宙を舞い、ぶつかり合っている。

『おーと、織斑選手押されて気味だー！？ 頑張れ織斑君。私の食券の為に！！』

黒髪黒目。中背の痩身で、特に目立った特徴も無い。……眼つき以外は。

鋭く吊り上がった、眼つき。刃の様な鋭さのある雰囲気満ちている。首から下げたダイヤモンドのような宝石をはめたネックレスの鎖部分を弄りながら、弟分の戦いぶりを眺めている。

（実力は五分と五分と、言ったところか……）

だが、一夏は相手———鈴と比べてISの実践経験が圧倒的に少ない。それに加え、気の所為か、鈴の攻撃が激しい。一向に攻撃の手を緩める気配が無い。

まあ、どうせ、一夏が無神経な事でも言って怒らせたのだろう。

どうでもいいが。

「しかし、ISに乗り始めてからこんな短期間でここまで扱えるようになるなんて聞いたことねえぞ」

ISを自分の意のままに扱えるというのは、慣れが必要だ。自分の感覚の延長。今まで無かったソレをいきなり扱うのに、かなりのセンスが要求される。そう言ったセンスを先天的に備えているのが、『ヴァルキリー』、『ブリュヒンデ』と呼ばれる……

「きゃっ」

背中に何かが当たる。振り向くと、尻餅をついてる少女がこちらを見上げている。この少女がぶつかったのだろう。少女は呟く。

「あ……すみません」

どうにか聞き取れたその声を発す、その少女に、時世はふと、見覚えがある事に気づく
妙に誰かに似ている。

（なんだ？ コイツ見てると、いつもその場をひっかきまわしては、責任をすべて他人に押しつけて、自分はずっとトonzラかまして、何事も無かったように振舞う。そんな台風無責任セクハラ娘を思い浮かぶ様な……）

言い様のない感覚を覚える。が、そのままにしておくわけにもいかない。時世は手を差し出す。

「俺はいい。大丈夫か」

こういう時、ぶっきらぼうに言うのは、どうにも治りそうにも無い。

少女は時世の手を取り、立ちあがる。刹那————
ドガン！——轟音と振動がアリーナ内に響く。なんだこれは、どうなってやがる。

いくつもの選択肢が浮かぶ。が、時世は静かに悟る。何者かの襲撃。

根拠がある訳ではなかった。これは勘だ。が、その勘は裏付けされる。

アリーナの観客席の隔壁が閉まる。間違いない。

（一夏は、一夏はどうした！？）

先ほどの衝撃でバランスを崩した少女を起こし、時世はISのプライベートチャンネルを開く。

「千冬。どうなってやがんだ。状況を説明しろ！」

回答は無い。妨害されてるのか。

「くそっ」

「あ……あの、これは」

「ああ、どうやら異常事態の様だ」

不安に思ったのか、少女の顔がこわばる。いつの間にか、自分の腕にしがみついている。

怒鳴りつけたかったが、直前で押さえて、平静を纏って告げる。

「大丈夫だ。いいか君は今からここを離れろ。ここは危険だ。どこか教員のいる所まで逃げろ。教員じゃなくてもいい、とにかく誰かという」

「あ……あの、あなたは？」

「俺は大丈夫だ」

「で、でも」

「早く行け」

急かす様に、少女をその場から離す。何度もこちらを振り返りながら、少女は消えた。

時世はそれを確認すると、服の下に入れてた物を取り出す。

輝くダイヤ。球形の織の様な物に納められた、全体としてはまるで両端の羽が伸ばした

生き物。一端が上へ、一端が下を指している。

それを眺め、時世は囁く。

「飛ぶぞ」

上空では、激しい戦闘が続いていた。
突然の襲撃者。全体を機械で覆った、まるで人形を思わせる。

「どうなってんのよ!」

鈴が龍砲で襲撃者を撃つ。不可視の弾丸が襲撃者へ向かう。全身武装の漆黒の人形は、微動だにせず、それを受け止める。

が、襲撃者は無傷。

「くそっ、なら俺が!」

白式の単一機能、零落白夜。あらゆるエネルギーフィールドを斬り裂く力。

刀型装備——雪片を振り上げて、発動する。エネルギーを纏った刃が展開される。

一気に突進をして、それを縦一閃に振り下ろす。

漆黒の人形は、それを難なくかわす。人間業とは思えないほどに。

一夏は続けて剣をふるう。一撃、二撃、三撃。すべてかわされる。

一夏は即座にその場

から、退避を試みる。肌が泡立つ。早くここから離れろ!

漆黒の人形は手をかざす——その目標は俺だ!

掌からレーザーが発射される。——間に合わない!

「一夏あ!!」

箒? 聞こえてきた声は確かに箒のだった。人形も、動きを止める。

一夏はその隙に、その場から離脱する。距離を置いて、声が聞こえてきた方へ視線を向ける。やっぱり箒だった。

彼女はアリーナのビットにいた。

鈴がうめく。

「あの子!? 何してんのよ!」

「箒!」

「一夏! その程度の敵に勝てなくてどうするんだ!!」

何を言ってるんだ! こんな時に!

巡る思考の中で、一夏は毒づく。人形が箒に気づいた。人形は手を箒へ向ける。

(イグニッション・ブーストでも間に合わない)

「箒イ!!」

叫ぶ。が、無情にもレーザーが発射される。……箒!

「箒イイイイ!!」

———刹那

ドガンっ！

別の場所——アリーナの観客席の隔壁を突き破って、緋色のナニかが、レーザーの光の前に出て来る。

爆発する。

黒煙を掻きわけて、緋色の機人が、現れる。

一夏は、思わず唾を飲む。

焔を連想させる緋色。見てると何故か、力が湧いてくる。それを纏っている人物に、一夏は見覚えがあった。鈴も驚いている。

皮肉気な笑みを浮かべ、瞳には鋭い刃の様な光を秘めた、ソイツは言う。

「バカ共が。俺の手を煩わせてんじゃねえよ」

舌打ちをして、ソイツは人形を睨む。

一夏は、何故か、不安が消え去るのを感じた。ああ、来たくれた。この場にいる、誰もがそう思っただろう。鈴も、箒も、安堵の表情を浮かべ、ソイツを見つめる。

「俺の家族にしてくれたことの借りは返させてもらうぜ」

緋色のISを纏ったソイツ——時兄は、腕を組み直し、続ける。

「てめえのその出来の悪いIS^{ッレ}を剥いでやるよ」

バカ共が。俺の手を煩わせてんじゃねえよ（後書き）

だれ〜もしら〜ない

って、城みちるを歌ってる場合じゃない。報告です。

番外編製作しています。

タイトルはまだ決まってるんですけど。

後ヒロインの報告です。皆さまアンケートご協力ありがとうございます。
ます。

皆さまの意見のもと、ヒロインが決定しました。この通りです。

簪 楯無 のほんさん

サブヒロイン クラリツサ ナターシャ

ご協力ありがとうございました。

感想待ってます。

強くなったな（前書き）

遅れてすみません！！

もう駄目な作者ですみません＞＜

最近忙しくて……そんでもって小説が何かうまく書けなくて、これ、三回も直したりして……

とにかくすみません。

強くなったな

IS学園のアリーナの機能を統制する管制室。その巨大モニターに映し出されてる物を、

織斑千冬は見つめていた。

大きく映りだされたのは、全身を装甲で固めた、いわば全身装甲。漆黒のフォルムはまるで、どこかの偶像に思わせる。

だが、そんなものはどうでもよい。

その全身装甲に立ちはだかるのは、篠ノ乃を守る様に立ってるのは、緋色の外装を纏っ

た時世。毎度の皮肉気な眼つきを浮かべてる。

画面に映されたその姿を見て、千冬は昔の事を思い返す。そして
呟く。

「遅いぞ。時世」

「すげえ」

ただ一言。ただ一言しか発せなかった。もっと他にも言える事はあつただろう。が、こ

れしか言えなかった。

織斑一夏と鈴はただ、茫然とするしかなかった。

「何なのよ、時世さん。一体……」

鈴がうめく。

いつでも手助けが出来るように、と待機していたが、その必要は無かったようだ。

時世と全身装甲には隙が無かった。全身装甲の嵐の様なビームのラッシュを、時世が巧みに捌く。いや、受け流してる様にみえる。

あの動作には見覚えがあった。箒と仕合（というか一方的に箒が勝負仕掛けてただけだ）してた時の動きに似ていた。

箒の剣を流して、そしていつも足を引っ掛けてた。あの動きはまさにその時のものに似ている。

ふと、気づくと、時世はISの拡張空間からセシリアのより小ぶりなレーザーライフルを取り出している。だが、全身装甲の動きは速い。とてもじゃないが、捉える前にやられるだろう。

……何をするんだ？

そして、その疑問はすぐに解消される。

……五秒か。

時世は、カウントを計った。全身装甲は、きっちり五秒間だけ、ビームを発射する際、反動がある為に、どうしても動きを止める。そして放つまでにエネルギーの充填に、三秒

程。

（三秒もありや十分だ）

即座に彼は、ISの拡張空間から唯一の武器である、レーザーライフルを取り出す。

威力はあるのだが、発射時のタイムラグがあるのが悩みの武器だ。

時世はライフルのエネルギーを溜め、空を駆ける。

全身装甲が空中を走る。時世の後ろをきっちりついてくる。

急転直下をする。地面に激突するような勢いで、時世は落下する。背後の全身装甲も

落下する。地面との距離が縮まっていく。

「はああああああ！！！」

急降下の体勢から時世は反転して、地面を蹴って全身装甲へ飛んだ。

装甲腕からブレードを展開し、体勢の間に合わない全身装甲へブレードを突き立てる。

早い反応速度を誇る全身装甲でも、この奇襲に対応できなかったのか、胸部から、ブースターへ掛けてブレードが突き刺さる。

堕ちる全身装甲はそれでもなお、体勢を直し、時世へ、レーザーを放とうとする。ブー

スターが破壊された今は、反動矯正のための工程は省くだらう。だとすると、残り三秒でビームが放たれるだろう。

時世の片手のライフルはすでに、充填を終えていた。

全身装甲へ向け、時世は放つ。赤い———緋色の閃光が銃口から現れる。まるで、焰の

様な、それは、時世の怒りを表してる様だった。事実、そうなのだろう。

緋色の逆鱗が、全身装甲を貫いた。

「時兄、これはなんだったんだ」

「それは、こうすれば分かるさ」

時世は全身装甲だったものへ蹴りを入れる。すると、全身装甲の機械部があらわになる

そう、全身装甲は機械のみで構成された無人機だった。

「な、なによこれ。こんなことってありえない……」

鈴が信じられないと言った面持ちでうめく。それも当然だろう。

ISは人間が動かして、始めて起動できる。

それが通説であり、絶対である。人間が乗らない限りISは動かないのだ。

ISを自立稼働させる自律神経伝達ユニットは、いまだに完成されてないシステムである。いや、完成されないと言った方が正しいのかもしれない。

ISに自我というシステムを組み込むのには、危険が伴う。それはISのコアに依ると

ころが大きい。コア深層部にあると言われる自意識が、表面化した時、どのような事が起

こるのか分からないからである。そんな未確定性のあるシステムを完成させる事に、技術者たちは興味を失くした。

そう、表向きは。

一つのISに人間が出来るような事をさせるのに、一番の有効な制御装置は何か。最も

なのは、人工電子頭脳。だが、それに搭載させる疑似人格プログラムは制作に時間がかかる上に、莫大な金がかかる。その点、人間の脳は安価だ。ただ同然で手に入る。それだっ

たら人間を乗せた方が手っ取り早い。

つまるところ、一番安価な部品は人間なのだろう。

ふと気付くと、一夏は興味深々と、鈴はありえない物を見る様に、各々の視点で無人機を見る。

もっとも、鈴の場合は現実なのかどうかを確かめてる様だが……そんな鈴を横目に、一夏がはっと気付いた様に時世へ向く。

「そうだ！　なんで時兄がここに！？」

「え？　あ、そ、そうよ。なんで、時世さんがここに！？」

「あー、そういや、そーだったな。まあ、後で話してやるよ。取りあえずビットに戻るぞ
怖いのがお前を待ってるぞ」

そう言つて、時世は後ろへ向ける様に親指を立てる。その先には箒がいた。それを見る
と、一夏は顔を青くする。その横に千冬がいたからだ。

「そ、そうだな。早く帰ろうぜ」

「そうね」

鈴も同意する。この二人は千冬を苦手としてるから、まあ、そうなるだろう。ふと苦笑を浮かべる。おそらく俺にも何らかが待っているだろう。だが、それも甘んじて受けてもいいような気になる。

そして、戻ろうと、時世が飛んだその瞬間——何かが動いた。破壊された筈の全身装甲が、装腕を振り上げ、レーザーを時世へ放たれた。防御も間に合わない。あのレーザーにはおそらく全身装甲の全エネルギーが使われてるのだろう。絶——

時世はレーザーの赤い極光に吞まれた。

「時世……？」

千冬は膝をついて、時世の名を呟く。隣の筈も驚愕に染まっている。だが、そんなのどうでもいい。

今起きた事が、一瞬理解出来なかった。いや、ちがう。しなかったのだ。脳が、精神が心……否定している。今起きた事の結果を察する事を……！

自己防衛の精神制御が働いてるのだ。自分を壊さない為に。

「あ……あ……ああ」

嗚咽の様な、自分でも情けない声が漏れる。これが、私の声なのか？ そう思ってしまった。
う程に間拔けな声だった。

千冬の視線の先、そこには赤い噴煙が舞っている。まだ、爆発の余波でアリーナが揺れている。

その爆発の中心には、時世がいた。

ISには絶対防衛がある。シールドバリアーで防ぎきれない攻撃があっても、これで縦者の命は守られる。そう、命は、だ。

（だが、それ以外は……？）

千冬は叫ぶ。

「時世！！」

爆煙が晴れる。思わず、目を逸らしそうになる。が、彼女は逸らさなかった。一瞬、白

い何かが見えた気がしたからだ。

もし、もし、そうだとしたら……？

あそこにいるのが、もし、私が思ったものだったら？
そして……

「時兄。大丈夫か？」

「ああ、助かった。礼を言うよ一夏」

エネルギー無効化の刀。零落白夜を展開した一夏が、時世をレーザーから守っていた。

千冬はその光景を見て、思わず声を漏らす。

「時世……バカ……」

「間に合った」

一夏は零落白夜を構えながら呟いた。

正直賭けだった。イグニッション・ブーストでレーザーよりも早く時世の元に着き、そ

して零落白夜を発動させる。すべてが賭けだった。

だが、一夏はその賭けに勝った。わずかの間に零落白夜を発動させ、レーザーのエネルギー

ギーを無効化した。安堵する。

零落白夜はもとの雪片二型へ戻る。

ふと、時世が何かつぶやく。

「助かった。礼を言うよ、一夏」

そして一拍入れて続ける。

「強くなったな」

その言葉は、今まで聞いたどんな言葉よりも胸に染みて行った。
一夏は時世へ顔を向けずにアリーナのビットへ向かう。

「当然だろ」

一夏は気づかなかったが、その後ろ姿を時世はじっと見つめていた。

強くなったな（後書き）

取りあえず、最後のほうに一夏の活躍を入れたかったんで。

感想待ってます

ゝ幕間ゝ リベンジ(前書き)

連続投稿できたー!!

番外編も宜しく。

～幕間～ リベンジ

『ふーん、確かに自立起動できるISはわたしにしか作れないね』

「ああ、そうだ」

携帯端末から聞こえる女性の声に男は頷く。

『でも、わたしはそんな物はとっくの昔に一度作ったから今更そんなの作らないよ——』

その時に作ったのももう壊したし』

その事は男も知っている。なぜなら、壊したのは男なのだから。

男は本題に入る。

「聞きたいことはそんな事じゃねえよ」

『ひょっとして……わたしを疑ってるの？』

不安げな、女。確かにこの状況では女を疑るのは自然だろう。何より、この女はそういう

う事をしそうな女だ。だが、男は嘆息して、告げる。

「俺がお前を疑ってるなら、こんな与太話しないでここにお前を呼びつけて半殺しにして

身動き出来なくさせてから千冬に差し出し取るわ。第一、俺がなんでお前を……」

と、そこまで言ったところでいらぬ事まで言いそうになる事に気

づき、咳払いをして、
言葉を濁す。

「と、とにかく。俺は別にお前がやったなんて思っちゃいねえよ——わかったか」

『……うん!』

男は、言う。

「聞きたいのは一つだ。お前のほかに出来る人間はいねえ——なら他のだったら?」

『………』

言いたいことが分かったのだろう。女は押し黙る。男はかまわずに続ける。

「アイツならどうだ?」

アイツ……。二人の脳裏に閃く、アイツ。

男は暫し、間を置いてから告げる。

「今回回収したコアの中に、こんなメッセージがあった《リベンジの時だ》ってな」

『………』

「生きてやがったんだ——ヤツが」

『……………』

「十年前、お前がマトリックスと一緒に開発したマトリックスの核。管制システムに搭載

する筈だった疑似人格性プログラム————MEGATORO
Nがな」

携帯端末をしまつて、男は目を閉じる。

浮かぶものがあつた————それは過去なのかもしれない。己が歩んできた時間。

それが明瞭に浮かび。見たくない物まで浮かびそうになった所で、彼は目を開けた。

男は見つめる。薄暗い空間で唯一照らされた場所を陣取った、それを。

言うなれば、それはガラクタだった。言いかえるなら、ただの鉄くずの山。そんなもの

が、つい先ほどまで自分を苦しめていたのかと思うと、彼は自嘲の笑みを浮かべる。

男は嗤った。何故か、嗤った、どうしようも無く嗤い続けた。

地下のラボに、誰に届く事のない嗤いが響いた。

時はさかのぼる。

機械の塊。言葉にするとそんなものだった。いくつもの機会が寄り添いあい、固まった物。そう言う風にしか見えなかった。

機械の塊の前に、一人の女がいた。女は機械の塊の中にある画面に向かって訊く。

「調子はどうだい？ MEGATORON」

『……………』

回答は沈黙だった。

女はそれでも続ける。

「彼は、貴方の身体をいまだに持ってるわ」

『……………き、よ？』

「そう、貴方の身体となる筈だったモノ。その心臓となるコア。マトリックスを……………」

そう言うと、ノイズが画面に走る。つんざくような音が耳に響く。それは、まるで慟哭

だった。機械の慟哭が、彼女以外誰もいない部屋に響いた。声にならない叫びの中に、唯一

理解出来るメッセージがあった。

『リベンジ』

ゝ幕間ゝ リベンジ（後書き）

感想かもーん。

実は作者の一番好きなキャラは五反田弾（でも優遇する気は無い）
そして好きなヒロインが、楯無と簪

テメエがそれを言うか（前書き）

賛否両論に分かれるかもしれない。
だが、それでも私はやる！！

とまあ、こんな感じの今回です。

テメエがそれを言うか

聞こえるものがあつた。

普段なら放っておいたかもしれない。その程度のものだ。

が、彼女は起きた。それにも別にどうってほどの理由があつたわけではない。

シーツを払って彼女は立った。ふと部屋を見渡す。部屋は彼女の性格を表してるかのよ

うに散らかしている。普段なら偶に来る保護者気取りの思い人が片付けてくれるのだが、

昨日、彼はいくつかの始末書と事後処理に追われており、来なかった。

あとは隙間の多い本棚に机があるだけ。

いつも彼女の身の回りの世話してくれる彼は、自分に初めての感覚を与えてくれる人で

あり、弟と同じく、守るべき対象でもある。

向こうの壁にかかつてる鏡に自分の姿が映っているのが見えた。

吊りあがった鋭い目つ

きをした長身の女性。女性にばかり、モテてしまうのが悩みの種だった。

床に無造作に置かれた服を足でどかして、彼女はクロゼットへ向かう。確かまだ替えの

服はあつた筈だ。あと二日分は大丈夫の替えは彼が用意してくれていた。

——と、その前に。

彼女は思い出したように、机の上に置かれた携帯端末へ手を伸ばす。

彼女は物持ちがいい、と言うより替えるのが面倒だった。携帯端末は今は流通してない

古いタイプで色は黒だった。その代わり頑丈。

彼女は携帯端末の画面へ顔を覗かせた。

そこには、一通のメールがあった。

差出人は、ドイツ軍空軍三佐ラウラ・ボーデヴィツヒ。

朝目覚めることには規則性がある。拒みたくても拒めないものだ。

春が過ぎ、初夏が近い為か、少々寝苦しい。IS学園のある人工島は南よりな為か、

初夏の訪れは早い。季節の変化に機敏な土地柄である。これは、ここがかつてレジャー

施設の開発地であった理由でもある。IS学園の人工島はもとは頓挫したレジャー施設

の開発跡地を改造したもので、そこに建設されたのがIS学園である。

寝返りをすると不意に、何かが手に触れる。むにゅ、とした感触が掌から脳へと情報

として伝わり、時世の覚醒を促す。

手を即座に放してベッドから飛び起きるように身体を起こす。シートを剥ぎ棄てると、

そこには————全裸ですやすやと寝息を立てる麻耶がいた。

時世は頭を抱えてうめいた。

「何しとんだ、このクソアマは」

とある理由から時世は狙われることが多い。寝込みなども当然襲われる。

その為この部屋には、数々の防犯、不法侵入者への対策がなされている。とても容易に

入り込めるものではない。

その筈なのに。

「何故こいつはこうもたやすく入り込めるんだ？」

これで何度目だろうな。時世は今だ夢心地の麻耶を眺めながら防犯システムを見直しする事を今日中にする事を脳内に記憶する。

無駄だろうが。おそらくは、十蔵の奴が手引きしてるのだろう。

あのクソジジイ。

給料カットさせる事を胸中で誓う。どんな手を使っても。

時世はシートを麻耶にかぶせて（あまり見ないようにしながら）ベッドから降りて周り

を見渡す。目当ての一つである床に置かれた黒いシャツを見つけて、袖を通す。

再び見渡す。本棚によって部屋の大体の面積がとられた部屋は少々狭く、散らかっている。彼は自分の事にはあまりにだらしない。

部屋にあるのは本棚と寝床とクロゼットしかない。ごく簡単な構造のこの部屋を見渡し

ても、やはり、ぱっと見では麻耶の侵入経路は分からなかった。窓には侵入した後が無い

そうすると何処から。天井も見上げて見る、が、やはり分からない。

思考を巡らせていると、

「時世さん……」

まず、柔らかな感触が背中に伝わる。

シャツ越しでも、その柔らかさが分かった。

次に細い腕が時世の視界に現れる。白い、女性の腕が小柄な時世を捕らえる。振り払お

うとするが、女性特有の不可解な力に（と言っても時世の腕力などたかが知れてる）屈服

され、呆気なく捕まり、背後の人物へ抱き寄せられる。

甘い吐息が耳に当たる。

時世の身長は千冬と同じ位で、成人男性としては低めである。それに加え小柄で、弱々

しく思うが、皮肉気につり上がった眼つきがそれら無しにしている。背後の人物とも、

同じ様な体格である。身長はまだ時世の方ががあるが、ちなみに背後の人物とは、言うまでも無く麻耶だ。

どくんっ。と心臓が跳ね上がる様に高鳴る。

何だ、この状況は。全裸の麻耶に抱きつかれてるのか？

己の力の無さを嘆くよりも、困惑が勝った。こういう状況は時世が最も苦手とするものだった。動悸は治まらない。

が、すぐに意識を組みかえる。動揺を悟られない様に表情も感情も消す。と自己暗示をする。

落ち着け、冷静になれ、と文言を胸中に繰り返す。そして、顔だけ振り返ると。

時世の背中に寄り掛かって麻耶は熟睡していた。

暫しの沈黙が部屋の中に満ちる。いや、完全に黙してはいなかった。麻耶の規則正しい

寝息が微かに聞こえる。ついでに酒の匂いもする。

コイツ、昨夜呑んだな。

時世は溜息をついた。なんかもう、バカらしくなってきた。向き直して、麻耶の肩を掴んで向き合う形になる。

「起きろっつーんだよ。テメエはいい加減に！！」

肩を揺らして麻耶を起こすが、起きる兆候は見えない。

こめかみの辺りをひくさせて、時世は肩から片手を離して拳を作って、振り上げた所で

思いとどまる。待て、待つんだ。落ち着け俺。ここでこいつをどうしても解決にならん。

そうだ、平和的に終わらせよう。例えば、そう、窓から落とすとか。幸いここは四階。

目覚める間もなく地面と激突だ。後始末はどうするか……
着々と計画を練っていると、麻耶が時世を引き寄せる。

「……時世さん」

動きが止まる。

麻耶は構わず続ける。

「……す」

「時世。起きているか？」

今度は時が止まった。ギ、ギ、ギ、とブリキ人形の様な錆び付いた可動部特有の軋んだ音を鳴らしながら時世は、ゆっくりと、顔をドアへ向ける。

ふと、昔の呼び名を思い出した。どうしても良くて忘れてた。あんまり気に入って無かったし。

魔王の時世。何故かそう呼ばれた。もう一人も似た様な名があった。そう、鬼の千冬。

今まさに、鬼が、そこにいた。

「……………」

「……………」

沈黙を挟んで、千冬は口を開く。

「時世」

重い口調。ドアまでそんなに距離は無いが、心なしか表情が見えない。

それが俯いてるからだと気づくのに、数秒を要した。時世は返事する。

「ああ、なんだ」

「知っているか？ いや、知らない筈は無いな。お前が言った事だ。致命傷には二つある
一瞬で生命活動が停止する大ダメージ、もう一つは、決して縫合できない傷だ」

「それで？」

促す。言わなくても大体続きは分かるが。

千冬は素敵とも思えるような満面の笑みで言う。

「どっちがいい？ 両方と言うのもいいぞ。何安心しろ上手くやる」

どっちにしろ結果は変わらないと思うが。と口には出さないでうめく。

この窓から飛び降りて、逃げられるだろうか？ という打算が浮かぶがすぐに却下する

時世を逃がさないと言った風に、麻耶が時世を抱きしめてるからだ。しかも、いまだに眠っている。

千冬の殺気の中でも動じずに眠れるというのは、一体どういう

神経してんだ？

そして、

「時世さん」

ぎゅっ。これは抱き寄せる音だろう。

ぷちっ。これは死へのカウントダウンが終わりを告げる音だろう。

「時世……」

ゆらり、と身体をふらふらさせて、千冬が近づいてくる。静かに、足音も立てずに。

まるで、死神の様に。

「覚悟はいいか？」

どこから出したのか。その手には出席簿があった。この場合死神の鎌だろう。

そして、彼女はそれを振り下ろした。

IS学園の学園の長である校長はIS技術の権威でもある。日夜、新技術を開発してるIS学園。各国の新技術の実験場であ

り、これは他国への牽制の意味も持つ。

毎年、優秀なIS操縦者を輩出する学園は、その見返りとして各国の最新技術が入ってくる。その長は研究主任としての側面も持つ。事実、世界中のISの頂点に立っていると言っても間違いじゃない。

学園の校長室は特に目立った装飾はされていない。自分が校長を引退した時とまるで変わって無いとも言える。

数年も経てば変わる物もある。が、ここは変わらなかったようだ。

上等なソファだけが、今の自分の校長室での席だった。

時世はソファに腰掛け、目の前の人物達と相対していた。自分の仕事を受け継いだ二人

の後継者である。時世からコネクションを継いだ学園の現在の校長と、学園の運営を継いだ、その夫である十蔵。

校長は机の上で手を組んでいる。相変わらず食えない面をしている。十蔵は応接用の子机を挟んだソファに座っている。

今、この校長室には学園の最高権力者達が集まっていた。そしてそれは、世界のトップ達と言っても過言ではない。

そんな中、くつくつと笑いをこらえながら、十蔵が訊く。

「どうしたんだい？ 時世君。随分ひどい有り様だが」

「テメエがそれを言うか、あ？　クソジジイ」

げんなりしながら時世は十蔵を睨む。包帯の巻き過ぎで顔が見えないが、皮肉気に吊りあがった瞳だけは見える。

時世は続ける。

「大方テメエが酔っ払ってうろついてた麻耶を上手く誘導して俺の部屋にぶち込んだんだろ。仕事サボってそんな事してんじゃねえ！」

「君の身を固めさせることも私の仕事だと思うんだが」

「誰が決めた、んなモン！　余計な世話だクソジジイ！」

「当然、私だが？」

「テメエエエエエエはあああああ！！！」

唸るように声を荒げる時世。拳を固めていざ、いかんといった具合に、ソファから身を乗り出して十蔵へ向く。

「ふむ、お気に召さなかったか……じゃあ次は織斑先生を……」

「よし、上等だ。今ここでケリを着けてやる。ああ、もう待てねえな。テメエの残り少ない寿命を一気にここで減らしてやる。ゼロに減らしてやる。オイ、立てやコラ、やるぞ

俺は、いざとなったらとことんまでやるぞ？ 俺は」

「おやおや、御老体に手を上げるとは、ひどい事をするねえ」

「うがー！ー！！」

頭を抱えながら叫ぶ。

「まあまあ、時世さんも抑えてくださいな。アナタも、いくら時世さんが甲斐性なしの童貞でも、山田先生を襲うような事が出来ますか？」

いつの間にか移動したのか、校長が間に入る様に立っていた。
時世は半眼で校長を睨む。

「……一番ムカつくのはお前なんだがな」

「あら？ なにか？」

「お前ら、俺に喧嘩売る為にここへ呼んだのか？ あ？」

「まさか、まあ確かにそれも捨てがたいですが、今日は別件です」

十蔵の会話の中に、途中聞こえた事は無視して、時世はソファに腰を下ろす。

「……やっぱ、アリーナでISを起動させたのは不味かったか。隠蔽工作も間に合わなかったのか？」

気づくと、二人もソファに腰をおろしていた。

ISは男には起動できない。これは当然のことである。まあ、例外もあるが。

一夏もその例外の一人。そしてその存在は世界中にすでに知られている。

時世は違った。時世の存在は政府によって秘匿となっている。彼が起動する際は、手続

きを踏まなければならない上に、隠蔽工作をしなければならない。

今回は非常事態の為、それらの工程を踏まなかったうえに、不特定多数の生徒に時世の

IS姿を見られてしまった。

「ええ、その貴方の勝手のせいで私達はあれからずっと寝てないんですけどね」

「いやー老体にきつい労働だったなー、あれは。労働基準法は何処へ行ったのやら」

よく見ると、二人の眼の下には隈が出来ている。

時世も長くその後始末に追われていたが、寝る時間はあった。そう考えると今朝のあれは、問題を丸投げした者へのせめてものの報復だったのだろう。

「と、とにかく、これからどうするかだな！ 一番妥当なのは俺の存在を明かす事だが、

ヘタに明かすとヤバイ事まで暴露されちゃう。芋づるでシモンズまでやられる。それだけは防がねえとな」

「それについては大丈夫ですよ、時世さん」

人差し指をだして、現校長。

「時世さんの存在を明かしても、問題無い方法があります。これは日本のＩＳ委員会公認の案です」

「……で、どんな手だ？」

激しく嫌な予感しかしないが、時世は訊いた。
校長は満面の笑みで、告げる。

「時世さんにはＩＳ学園に入学して貰います。世界で二人目に発見された男子のＩＳ使いとして」

言葉を失うとは正にこの事だろう。時世は何も発せなかった。理解したからではない。
理解できなかったのだ。

暫しの間、沈黙を挟んで。
彼女の言葉をゆっくりと咀嚼するように、聞き入って――――
時世は、呆けたように口を開いた。

「は？」

「ちなみにこの案は織斑先生も山田先生も了承しました」

「ふざけんなああああああ!!」

包帯を顔中に巻きつけた包帯男の虚しい絶叫が、数年ぶりの古巣

に響いた。

テメエがそれを言うか（後書き）

なるほど、最近君が空中に向かって変に呟いたり、高速道路に向かってうさぎの足を投げたのにはこんな理由があったんだね、後藤君。って誰だぁアアア！！

トランスフォーマーダークサイドムーンのカーリーの日本語版の声が小林早苗（魔法少女リリカルなのはのリインフォースの声をやった人）だった事に驚きを隠せないセキシンです。

ヒロインと覚せい剤の違いって何？　みたいな事をほざいてたら友人に警察を呼ばれそうになったりと、あと、カラスの死骸を何かよく見たりとしますけど。

正常です。

すんません、何か疲れてる様です。

脱水症状って怖いね。

ちなみ私はなのはの中で一番好きなキャラが、はやてだったり。

作者のレベルアップの為に、何か書き方に指摘がありましたら、遠慮無く感想に書いてください。

後悔してるか？（前書き）

疾風迅雷落とし（しっぷうじんらいおとし）……前方から相手の股間に頭を入れて持ち上げ、空中で相手の両足首を掴み、両脚で相手の両腕の動きを封じた状態でキャンバス目掛け落下する。物理法則もなくそも無い大技……

そんな前書きか能書きだかで始まる今話は、まあ、散髪？

後悔してるか？

ジヨキ、ジヨキ。

この独特音を聞いたのはひどく久しぶりな気がする。思えば、そんな暇も無かった。鋏の髪を切る音が、IS学園の人工芝の高原に消えていく。風は無く。髪が揺れて切りにくくなるという事は無い。

意外だった。時世は千冬とは数年間、その弟と共に暮らしていたが、彼女が鋏を扱えるとは知らなかった。IS学園の近くには髪を切りに行くような所は無い。その事をどうしようかと唸っていると、突然千冬が切ると言いだした。取りあえず、任せたのであった。杞憂は無用だったようで、千冬は器用に髪を切っている。知ってる様で知らない千冬がそこにいるようで、時世は奇妙な感覚を覚えながら、苦笑を浮かべる。

（まあ、俺がそれだけ——そう思う程歳とったってことだな）

今は授業時間で、この場所に誰かが来ると言った事は無い。普段とは違う視点で見る、こここの光景は、また格別だった。まあ、気のせいだろうが。

「意外だったな」

「何がだ」

「いや、お前がこんなこと出来るなんてな。刀振り回すしか脳が無いと思ってたが」

「バカにしてるのか」

「お前の成績表付けてたのは誰だと思ってんだ？　まだ教員が少なかった頃は俺だ。お前の成績と出席日数も記憶してるよ。戦技の方が学業よりぶっちぎりで高かったな」

その言葉に、千冬はうめく。

「本当にいい性格してるな。先生」

褒め言葉として受け取り、時世は自嘲混じりに笑みを浮かべる。

『先生』。千冬にそう呼ばれたのは、最後は何年前のことだろう。その頃、時世はまだ二十だった。この学園は二十なりたての若造が校長をしていたのだ。そのうえ、専用機持ちが集められた特別教室の非公式戦闘顧問だった。

千冬たちのような——俗に言う天才達の——IS戦闘の指導をしていた。もっとも、まともな戦闘理論も構築されてなかった当時は、現代の様な実戦的な指導ではなかった基礎訓練を施し、その上でIS装着時での模擬戦闘をしていた。つまり一昔前のスポ根の様な事ばかりだった。ちなみにISによる戦闘理論が構築され始めたのはごく最近の事である。

ちなみに組み立てたのは時世（監修は千冬）。
鉄の小気味良い音を聞きながら、うとうと、とし始めた頃。

「時世」

千冬が呼びかけが聞こえ。時世は身体を動かさずに返事する。

「ん、なんだ」

「後悔してるか？」

「……………」

あまりに突飛な質問に、時世は押し黙ってしまふ。沈黙が挟む。
その間も千冬は鉄を動かしていた。嘆息交じりに訊き返す。

「なんで、そう思ったんだ」

「普通、高校からやり直しさせるなんて事になったらそう思うだろ」

「もつともだよお前の言う事は。流石は教師」

「茶化すんじゃない。お前は平気なのか？」

いい加減な態度に呆れたのか、千冬は片目をつぶりながらそう言
った――のだろう。

千冬との付き合いは長い。見なくてもどんな表情をしているのか手
に取るように分かる程
の付き合いはしている。……のつもりだ。少なくとも、時世にとっ

ては。

彼女は先ほどの校長室での話を言っている。

他にも選択肢はあったのだろう。あの性悪老夫婦の提示した他の選択肢はあったのかも

しれない。いや、時世にとっての最善策は他にもあった。

確かに強引な手だ。身元をでっちあげてIS学園に入学させることで事件に現れた男の

IS操縦者の存在を有耶無耶にするというのは強引ではあるが、現実でもある。IS学園

は一種の不可侵領域でもある。どんな権力を以てしても、それを覆す事は出来ない。それ

に加え学生という身分なら、用務員や教師と比べて触れさせない大義名分が出来る。身元

の偽装には問題は無かった。『ドイツの希望の星』に任せれば大丈夫だろう。腕は確かだ。

性格上に問題があるが。

束に頼まなかったのは、あいつは色々派手にやってしまう。『遊

び』で機密データやら

を書き換えてしまいかねない。

口元を歪ませて、時世は言う。

「どうでもいいことさ。そんな事お前が気にする事じゃない」

またそれか。といった風に、千冬は時世を見つめてる――のだろう。

幼馴染の表情を予想するのは容易かった。それと同じ位に、間違った選択するのは簡単

だ。百億通りのある選択肢も、結局は二つに分類される。得をするか損をするかだ。

だから、損のある選択をするのは簡単だ、自由を求める事がそう

なのだから。

得のある選択肢は損をする選択肢より大幅に限られている。

誰かが言っていた。得のある選択肢を求める限り、人は自由になれない。そういうことだ。

それでも、

（それでも、選択の余地はある）

分かるようで分からない。が、容易い。出来ないように出来る。それでもって簡単だ。

言葉遊びの様な文言を口の中で転がしながら、時世は眼を瞑る。

「千冬」

鋏の動きが止まる。時世は構わずに告げる。

「俺はなにも後悔してないよ」

浮かんだのは過去だった。マトリクスを手にした自分。その時はまだ少年だった。その

後、選択の結果、世界中を敵に回した。でも生き残った。

そのあとの選択——それらを含め、すべてに、後悔は無い。

「たしかに散々な結果だったがな。」

「本当にそうか？」

怪訝そうな表情（だと思ふ）で千冬が詰問する。

眼を開けて、静かに聞き入る。鋏の音と共に聞こえる千冬の声。

「私達はもう、大丈夫だ。一夏も強くなった――私も。もう、いいんじゃないか。もうこの間の様にも、あの時の様にもならない、いやさせない。だから……」

まるで懇願するように、千冬の声には苦渋がにじんでいた。いつの間にか鋏の音が止まっていた。

「お前は今まで、どんな思いで私達を守ってきたか、私には分かる。麻耶も、束だって知っている……一夏もお前を心配している」

鋏を近くのトレーに置き、続ける。

「もう、休んでもいいんじゃないか」

その提案に、時世は何も言わない。ただ黙する。千冬ももう何も言わなかった。

何の音もしなかった。無音の世界の中にただ二人、何も話さずにいた。言葉にしないで。もお互いの言いたいことは分かった。その証に、千冬もまた無言だった。

時世は鋏を置いたのを、終了と受け取ってマントを脱いで立ち上がる。マントにこびりついた髪の毛がパラパラと地面に落ちるのを確認して。マントを腰掛けてた椅子にかけて視線を辺りに投げる。

IS学園の校舎が寮の中庭から見える。実習訓練の時間なのか、

ISを纏った生徒が宙

に舞っている。あの慣れた動きはおそらく三年だろう。

そっと、千冬が時世を後ろから手をまわして抱きしめる。

白い。意外に千冬の手は白かった。腕も鍛えてる割に――やはり自分よりも――細長く

時世の胸の辺りを撫でる。一通り愛撫すると、彼女は額を時世の後頭部へあてる。

「相変わらず細いな、お前の身体は」

「そうだな」

最強の名を持つ無力な女と力を持つ弱い男の声も、切り捨てた髪の毛と一緒に、今更吹

いて来た風がかき消していく。

IS学園はもう、春が終わりを告げていた。

時世は声に出さずに胸中に呟く――ごめん。

後悔してるか？（後書き）

ふと思いついた

舞台はデジモン一期。

主人公は「諦めない」がモットーの少年。

年齢は太一と同じで、吊りあがった目つきが特徴。紋章は「不屈」データがこれ

名前 創 シン （はじめ しん）

概要

負けず嫌いな性格で、どんなものにも物怖じしない性格。諦めが悪い。

得意な事は特に無く、また苦手な事も特に無い。凄腕。全体的に小柄の十一歳の平均的な体型。胸に妙な痣がある。将来、ヒカリとくつつけるつもり。

パートナー

ドルモン。シンからはアイボウと呼ばれてる。

シンと同じ痣が進化時に額に浮かぶ。

要望があればやるかも……

全然変わってない（前書き）

ボー・バック・ブリーカー

うつ伏せになっている相手の片腕と片足をそれぞれ自分の手と足とで掴んで、背中に片膝を当てて、相手の体を反らせる。受けた相手は寝首を搔かれる夢を一生見続けるという……だったかな？

このオリ主。人間嫌いの筈なのに人間嫌いじゃねー！！
どうしてこうなった！

「あんたの力不足でしょ」

誰だ貴様！

あとがきへ続く。

全然変わってない

「えー、これより転入生を紹介する」

朝礼を済ませた後のホームルーム中の教室に、織斑千冬の声が良く通る。

身長は長身で長い黒髪を後ろにまとめた——と言うよりも、鬱陶しくて後ろにまとめたと言った感じだ。

鋭い切れ目で、刃の様な雰囲気を持つ女性である。世界最強の称号を持つに相応しい風格を備えているのだ。当然だ。と、時世は思う。

教室脇には副担任教師。これは千冬と対照的に子供っぽい容姿の女性。メガネをかけているおっとりとした印象の女性。山田麻耶が何が楽しいのか、満面の笑みを浮かべてる。

時世はなんでこんなにも昔から変わらないのだろうと、思う。

黒髪黒目。やや痩せ気味の体型だが、こちらも刃を連想とさせる雰囲気纏っていて、弱々しさはなく、その男はまるで一振りの剣の様に黒板の前にまっすぐに立っている。

特徴と呼べるものは皆無に等しいが、ただ一つあった。皮肉気に浮かべた鋭い目つきがそれだ。

男——時世はいま、耐えていた。

（落ち着け俺、ここで暴れたら余計——これ以上に面倒な事になる）
こんな屈辱的な事は初めてではない。この制服がぴったり合った

事も屈辱だが。

前に――学生時代に、もっとひどい目にも遭ったりした。大丈夫だ、この程度、耐えられる。というか、耐えろ。

己にそう繰り返してると、

「ほら、時世。自己紹介しろ」

「……はい、わかりました。織斑先生」

千冬に促され、時世は思いつき、唸る様に言う。生徒達は慄いていた。二人の間になにか歪みの様なものが見えたからだ。そしてそこから漏れだす異様な雰囲気にも何と発せなかった。

これも気のせいだろう、二人の後ろに鬼と魔王が見えたのは……ふと、前を見ると、一夏と箒が笑いをこらえてるのが見えた。後で鼻の穴に鉛筆をぶち込んで脳みそガタガタ言わせる事を誓う。

時世は意を決して、口を開く。

「黒兎時世……です。みなさん宜しくお願いします」

やった、よくやった、俺。自然な挨拶だ。少なくともボロは出てない。

緊張から解き放たれようとした。その時、

「キャアアアアアアアアアアアア！！」

絶叫が響いた。

時世は目を思わず瞑りながら、耳も塞ぐ。塞いでも殆ど無駄だった。脳がぐんぐん揺れる錯覚から覚め、時世が目を開いてまず映ったのは、いつの間にか席から離れて教室の奥へ避難してゐる大勢の生徒たちだった。

時世は項垂れながら、何となく泣きたくなった。

ホームルームが終わり、時世の席は一夏の席になった。その際、箒に睨まれると思ったが、何故か優しい視線だった。金髪の――確かセシリアだったか――女生徒には睨まれたが、すぐに逸らした。

周りに席の女生徒も、露骨に視線を逸らしていた。始め面白がってた千冬や麻耶も、段々シャレにならないと思ったのか、憐憫の眼差しに変わった。

……余計に時世の心をえぐった。
どうしたものかと黙る千冬に代わり、麻耶が口を開く。

「えーと、皆さん。とき……黒兎……君に訊きたい事はあるかな？」
場を和ませる為に言った発言だったのだろう。が、誰も手を挙げなかった。

麻耶は苦笑いを、千冬は普段通りすまし顔だが、少し引きつって

るのが分かる。沈黙が
教室内を支配する。

暫しの沈黙。

そして、一人に女生徒がおそろおそろ手を挙げる。

「あのう、え、と……」

言葉を選びながら、その女性とは慎重に言う。

「黒兔さんって……」

時世は何となくこの先は聞いてはならない気がした。聞いたら自分の何かがブチ切れる

気がした。聞くな、耳を塞げ、ここで暴れたら面倒事が舞い込むんだぞ！

だが、手が動くよりも先に女生徒が言ってしまう。

「ヤクザ？」

「違うわああああああ！！！」

拳を振り上げ、力の限り時世は叫んだ。

授業が終わり、休み時間。

「たっく、何だってんだよ」

頬杖つきながら、時世はうめく。

「大体、こんな善良な俺に向かってヤクザとは、どういう言い分だよ」

「いや、善良とは言わないだろう。あんなんじゃない、ヤクザと言われてもなあ」

若干乱れてしまった制服を直しながら、一夏。暴れそうになった時世を抑えて、制服が

着崩れしてしまった。細いくせにこういう時にはとんでもない力を発揮する時世を抑える

のに疲れたのか、机にぐったりしている。

無視して時世は愚痴を続ける。

「俺の様な品性方正な男の何処がヤクザってんだ。どこだ、どのへんだ？ どの要素で俺をヤクザと認定したんだ」

「さあ？」

投げやりな一夏の返事。それに代わるように、

「見かけとその言葉使いでしょう」

箒が答える。

この二人以外は遠目からこちらを見つめている。金髪に女性が時折近づこうとするが、時世の姿を見て引き返す。この教室で時世に近づくのはこの二人だけ。あとは怖がって近づこうとしない。時世は思った。そろそろ泣いてもいいよな。

「時世さん相変わらずですねー」

その声を聞いて、時世は後ろを向いた。鈴が苦笑いを浮かべながら突っ立っていた。片手をあげて、言う。

「よお、鈴。どうしたんだ一体」

「時世さんの様子を見に来たんですよ。私達の所為でもあるし」

「あー、すまん」

「ちょっと待て、達ってのはどういうことだ。俺も入ってるのか」

「当然でしょ、馬鹿！」

鈴の言葉にがくつと、一夏は俯く。

「あー、お前が強かったらこんな事にならなかったのになー。守るだのなんだの言っといてこれかー。残念だなー」

「うー」

「へっへっへっ、格好わりいー」

止めの時世の言葉に、一夏は唸り声を出しながら突っ伏す。その様子を見て鈴がぼそりと呟く。

「精神年齢低いわねー、相変わらず」

「ここまで変わらないというのも怖いな」

「え？ アンタがいた頃からも変わってないの？」

「ああ、全然変わってない……ついでに容姿も」

「それが一番怖いわね。本当に人間かしら？ まさか、本当に魔王かなんかじゃ」

「好き勝手にぬかしてんじゃねえ！！」

がたっ、と席から立ち上がって犬歯を向きだして箒と鈴へ叫ぶ。時世は語気を強めて続ける。

「大体黙って聞いてりやなんだ。人を魔王だの化け物だの精神年齢低めのカギだの、貧相

なヤクザだ、暴力暴発鉄砲玉ヤクザだの好き勝手に言いやがって」

「そこまで言ってます。いや、それ以前に人だったんですか？」

「箒イイイイイイ！！」

「落ち着け！！ 時兄！ 殿中、殿中でござる」

「ええい、放せ一夏！ こいつには一発痛い目を見せにやらん」

椅子に向かって手を伸ばす、が一夏に抑えつけられ、時世は身動きが取れずにもがいてるだけ。一夏は必死に時世を抑える。血の叫びを上げながら箒へ椅子で殴り向かおうとする時世。

その光景を見てて——くすり、と誰かが笑うのが聞こえた。

鈴はその出所を探す。と、教室の女生徒の表情が、恐れのかそれから、綻んでいる事に気づく。笑っているのだ。所々からも可愛らしいほほえみを浮かべてる

女生徒の姿がちらほら

見える。一番離れてたセシリアも、いつの間にか微笑んでる。

おそらく、もうこの教室で時世を恐れてる者はいないだろう。鈴と箒はそう直感した。

黒兎時世とはこういう男なのだ。あまり、近寄りたいと思うような容姿ではないが、周

りに何かを運んできてくれる。そこにいるのが当然と思うような男。空気の様な男なのだ

——鈴と箒はそう思う。

一夏と時世を見つめながら、二人は思う——やっと帰れた。

いつの間にか、時世の周りに女生徒が質問をしようと集まってきたるのが見える。セシ

リアも笑いながら近寄ってきてる。

時世も気づいたらしく、もがくのを止め椅子から手を離す。めんどくさそうな表情で、嘆息をする。

「はあ、どうしてもいい事には欠かないのかねえ。俺の人生は」

本当。一夏達はそう思った。

制服を着こなす時世を見て。

「それにしても、ここまで違和感が無いのも怖いわね」

「そーだな」

鈴の言葉に同意する一夏。箒も頷く。

確か今年で……そこまで浮かべた所で、三人はかぶり振ってその考えを振り払った。

少々背中に寒気がしたが、IS学園は今日も平和だった。

全然変わってない（後書き）

で？　だれだ貴様ら？

久遠「私は久遠よ」

梢「僕は梢！」

ああ、はいはい、オーフェンのあとがき見て適当に思いついたキャラ達か。没キャラか。

久遠「なんかやな言い方ね、それ」

梢「そーだよ。もっとオブラートに包んで言ってよ無謀作者」

じゃあ、出がらしキャラ。

二人「凶悪犯顔！」

お茶濁しキャラ！

二人「天然毒舌無能男！」

しばらく不毛な言い争いが続きます

久遠「さっさと紹介してよ」

はいはい。えーこのバカキャラたちは、なんつーか時世の娘という設定ですね。ちなみに母親は秘密。このキャラと結婚したらこんなだろーなってかんじでつくったんで二人は別々の母親ですね。ちなみに、娘なんで本編登場の予定はないです。

つか、誰と結婚させるかまだ考えてませんのでどちらかが消えるかも……

梢「番外編でだしてよ」

気が向いたらな。取りあえず本題に入るぞ。

おほん。今回もお読みいただきありがとうございます。あいも変わらず無謀な事ばかりしてますが、読んでいてくれる皆さまありがとうございます。

今回はまあ、転入する話でした。今回はなんか面白くて結構早く書けました。いつもこんな感じで早く仕上げられたらいいんですけど。とにかくこれかあも頑張ります。

梢「へえ、意外にまともなこと言えるんだ」

じゃかわしい!!

時世の名前だからだよ（前書き）

楯無との絡み話がなかったから突発的に書いてみました。

恋愛ベタだなあ、自分。

時世の名前だからだよ

足には二つの役割しかない。踏み出しの時に力を入れて地を蹴る事。もう一つはそれを

受け止める事。地を蹴った時に、その反動で発した力を受け止めなければ移動は成立する

事は無い。だから、強く蹴るのは踏み出しだけでいい。踏み込みま

で強くすると、ブレー

キを苛烈にしてしまう事になる。

というわけで、時世は理論通りに強く踏み出し、すり足でバラン

スを取りつつ、同じよ

うな動作で近づく生徒へ接近する。

お互い間合いに入ったところで、最初に動いたのは生徒――楯無

だった。

時世の体重は軽い。その上小柄な事もあって、必然的に後手に回

ってしまう。

楯無の鋭い手刀が槍の様に時世へ、向かう。

少し顔を横に逸らす。手刀が時世の顔――頬――を掠った。かま

わず、時世はさらに踏

み込んだ。胴着を掴み、足払いをする。が、楯無は時世の手を払い

後方へ飛び、時世の足

払いから逃れる。

体勢を直し、楯無は構えをとって動きを止める。

「やっぱり、厄介ですね」

「まあ、そう言う風にやってるんだし」

緋と白の胴着を纏った二人。間合いを計りながら様子見に入る。

IS学園の合気道部の

畳道場で向かい合う二人。紺袴の上に、楯無は白の胴着。時世は緋の胴着を纏っている。

———も動き出したのは、楯無だった。

（無拍子か……たつく面倒な技ばかり覚えやがる）

瞬間的に———察知する間もなく———楯無はすでに時世の眼前にいた。

相手のリズムを無視して、無駄な動作を踏まずに最短で相手に接近する。数ある拍子に

おいて最上級の技法であるとされてる。だが、かと言って無敵ではない。実戦武術を視点

とした篠ノ乃道場の無手の技においても、この無拍子に匹敵する奥義がある———いわば相

手のリズムよりも先に動く技である。まあ、何と言いたいのかという

つまるところ、そんなに警戒する事は無いという事だ。

「え？」

無拍子で捉えたと思った楯無が漏らしたのは、そんな声だった。

掌打を打ちこもうとし

たのだろう。手を添えるような姿勢だった。

楯無が時世に近づいた次の瞬間、時世は消えた———様に見えたのだろう。

時世は、楯無の右横へ小さく跳躍していた。右肘を振り上げて楯無のこめかみのあたりをえぐった———本気でやる必要はない。

力無く楯無は倒れる。その様子を見ると時世は姿勢を崩して、し

ばらく考え込むような
仕草をみせてから。

道場外の給水場のある方へ時世は歩き出した。

「なあ、悪かったって言ってんだろ」

むすつと、ふくれっ面で拗ねる楯無に時世は嘆息した。分からない様に。分かったら何て言われるか分かったもんじゃない。水で濡らしタオルを時世に打たれたこめかみをおさええている。かなりの衝撃があつたらしく、戻ってもしばらく目が覚めなかった。気つけでようやく目覚めさせたのだが、ずっとこの調子でそっぽ向いて座っている。

（ガキかよ……あ、ガキか）

いつもガキっぽいくせに、妙な所でガキっぽくない。時世の中の楯無とはこういう少女だった。学園最強の生徒会長も時世にとっては子供だった。そう、たとえ生まれとそ双肩に背負ってるモノが特殊でも。

楯無の家、更識家は暗部——ようは、暗殺者の家系である。

厳密に言えば対暗部用暗部。暗殺者に対しての暗殺者で、このことから更識家は暗殺者

殺しの異名がある。または蝙蝠と揶揄されている。

時世はやけっぱちに叫ぶ。

「あー！ もう、悪かったって言ってんだろ。いい加減に機嫌を直せ！ 何でも言うこと一つ聞いてやる。それでどうだ！」

「ほんと！」

がぼっ、と時世の方へ向く。ぱあ、と表情を輝かせて楯無は時世へ詰め寄る。気のせい
か、まぶしい笑顔の筈なのに、その眼には妖しい輝きがあった。時世はそれを見逃さなかった。そして、自分の迂闊さを呪った。

「えへへ」

「はあ」

「先生。なーんで溜息ついてるんですか？　こんな美人が膝枕して
いるのに」

時世の後頭部には楯無のふともがある。今の時世の体勢を見たら、おそらく千冬から

は体罰。麻耶は一カ月ほどの無視、束は笑顔で実験と言う名の拷問が待っているのだろう

——時世は楯無に膝枕をされてるのだ。

見下ろす楯無の顔を直視できずに、時世は、つい視線を逸らす。道場には誰もいない。

完全に二人っきりの空間だった。そう思うと、顔に熱がこもるのが分かる。

楯無はその反応が面白いらしく、覗く込むように時世の顔を見つめる。

「なんだよ」

「先生の顔って、本当に見た目若いすよね。身体も細いし、まるつきり学生ですね」

「ん、まあな」

「ふーん……うりうり」

「おい、頬をいじるな」

「えー、だってえ、さわり心地が良いんですもん」

「あのなあ」

時世はげんなりしながら呟く。あまりに楽しそうなその顔にあまり強く言えなくなってしまう。諦める事にした。

代わりに――

「依頼、頼めるか？」

「依頼、ですか」

前から頼みたかった事を告げる。

「ああ」

「報酬は？」

暗殺者としての顔で、楯無。

「ああ、口座にはもう……」

指を時世の口にあて、言いかけた言葉が遮られる。ウィンクするその顔には、暗殺者の顔でなく、いつもの人懐っこさのある表情が浮かんでいる。

「そうじゃなくて」

「え？」

「私への報酬です」

「……何がいいんだよ」

暫し考え込む仕草を見せてから、楯無は口を開く。前は何だっただろうか、一回デートだった気がする。あとで千冬と束にバレてえらい目にあった。具体的には思い出したくな

い。

「それじゃあ……一度だけお願いを聞いてもらうってのはどうです」

「なんだよそれ」

「お願いが決まったら言うんで宜しくお願いしますね。先生、いや、今は学生の身だから
時世君。あ、これいいかも」

何やら吟味するように、時世の名を繰り返す。何か言おうと思っ
たが、その楽しそうな
顔を見て忘れる。

「じゃあ、これからは時世って呼びますね。先生じゃまずいですし
ね」

「それはいいが……」

「そろそろ、人が来ちゃうからもう戻らないとまずいですね」

「ああ」

立ちあがって壁に掛かってる時計を見る。確かにそんな時間だ。
楯無も立ちあがって、
道場の出入り口へ向かう。時世はふと、楯無を呼び止める。

「楯無」

髪をはためかせて、楯無が振り返る。相変わらずの笑みを浮かべ

て。

「何？ 時世」

いつもの呼び方でないのが少し気になったが、その違和感を見無視して告げる。

「なんで、そんなに楽しそうなんだ？」

きよとん、と楯無。いつもは、絶対に見せない珍しい表情だ。その顔を見て、時世は胸中で呟く。

（そうだよな、コイツだって人間なんだよな。こんな顔だってするんだ）

そして、楯無の怪訝な視線に気づいて、時世はしどろもどろに言い直す。

「いや、別にどうでもいいんだけどよ。ただ、お前、俺の名前何でそんなに楽しそうに言うのか分からなくてな」

頭を掻きながら、時世は訊く。言い淀むと、つい頭を掻いてしまう。昔からの癖で、いくら言われても直らなかつた。時世は楯無を見る。その顔には、普段から浮かべてる笑顔と、また違った笑みがあつた。楯無は答える。

「それは、時世の名前だからだよ」

その意味を、時世は考えたが、結局分からなかった。

その後、楯無は時世の名を呼ぶたびにやたらと嬉しそうにするのがしばらく続いた。

時世の名前だからだよ（後書き）

ラブコメって難しい。

描写もすげえ、ムズイ。

すこし、勉強（小説の）した方がいいかなあ。

また批評受けそうな気がする今話でしたゝ

「何言ってんだアンタは」

いやさ、そんな感じしない？

「するな」

だろ？ でも一応コレ何度か書き直したんだぞ。

「それでこれか」

うるせえ。ちなみにこれはA案で、B案は活動報告に乗せときます
「どっちにしろ駄作だろ。途中の展開おなじだし」

だまれ！ とりあえずまあ、何か徐々に質が落ちて行ってる感が否
めない気がするけど、これからもよろしくおねがいします。

「そう言えば俺は誰だったんだ」

でわでわゝ

いい加減キャラ紹介しないとな……(前書き)

遅れて申し訳ございません。
忘れてて……

いい加減キャラ紹介しないとな……

名前 黒兎時世

身長 167

(ちなみに千冬が166(らしい))

体重 45

年齢は二十代後半。本人曰く三十路前。

概要

一応転生者で、千冬や束の幼馴染。黒髪黒目に皮肉気な眼つきが特徴。口が悪く、素行も乱暴。そのためよくヤクザと間違えられる。しかし、その容姿とは裏腹に優秀な頭脳と身体能力を兼ね備えている。だが、体格的な問題で、優れた身体能力があるにもかかわらず、武道や格闘技、殴り合いをする才能が無い。曰く、身体が足りない。

性格

かなりガラの悪い性格だが、実はかなりのお人好しでお節介焼き。表面上は暴力的で、人嫌いする傾向があるが、実際はあまり人嫌いしなく、暴力もあまり振らない。一夏曰くツンデレ。箒からはヘタレ。甘やかし癖があり、偶にそれでひどい目に会ったりする。

能力

頭脳、体術と、単体で見た場合時世よりも優秀な人材は幾人も上があるが、総合的な能力の高さと身体の少なさを補う程の戦闘技術の高さは時世よりも勝る人間はいない。柔術、古武術にも精通してゐる。

キャラクターモデルは、西郷四郎。

I S

名前 焰神

能力

格闘戦に優れた機体で、緋色と焰を連想させるカラーリングが特徴。2世代機体で性能は現行する量産型I Sよりもそこまで高くない。耐久力とスピードに優れた機体。胸に特殊なI Sコアを収納しており、本人でも未知数な機能が備わっている。

装備

エナジーブレード

腕に装備される剣型装備。熱量を帯びており、何でも切り裂く。時世の為に軽く作られている。

レーザーライフル

充填すれば荷電粒子砲並みの威力が出せる。

単一機能
現時点では不明。

いい加減キャラ紹介しないとな……（後書き）

一応、これ、この小説書く前にまとめたものに新たに書き足したものです。

ISの説明とかすげえ、いい加減。

これだけだと流されやすい感じがするなあ。

まったく、齒の浮く様なセリフしか言えないのかお前は（前書き）

変形羽根折り固め

相手の両腕をとって、そのまま背中に乗りうつぶせの状態で相手の腕を痛める関節技。

「昔から思ってたんだが、これ意味あんのか」

「いや、ない」

「ないんかい！」

まったく、齒の浮く様なセリフしか言えないのかお前は

そこは女なら誰でもあこがれる場所。

愛し合う二人が永遠の愛を誓い合う所。

今日もこの場所から、永遠の愛を誓った夫婦が生まれる。

草原を渡る風の音と共に、鐘の音が響く。

草原に建てられた真白い教会の中。聖堂には、これから生まれる夫婦を祝福する為に、

大勢の人間が集まっている。

聖堂の奥、牧師と共に佇んでいるのは新郎。花嫁が来るのを待っている。

そして、扉が開く。バージンロードをゆっくりと、ゆっくりと一人で進んでくる新婦。

——織斑千冬は自分の姿に変な所が無いか不安だった。

他の女性と比べて、自分は女としての魅力に欠けてる気が、する。こんなガサツな自分を

アイツは、受け入れてくれるだろうか。そんな不安が、彼女に胸に渦巻いていた。

強いだけを取り柄で、洗濯や家事などが上手くできるわけでもない。女らしい趣味があ

る訳でもない。こんな私に花嫁衣装など、似合ってるだろうか？

不安は尽きない。そうこう考えてる内に、千冬は新郎の前まで来ていた。

不安げに新郎を見る。似合わない白の衣装を纏っており——ここまで似合わないのも珍

しい。いつもは皮肉気な双眸も困惑の色が兆していた。着なれてない物を着てるからだろ

う、着苦しうにしている。別段、格好いいというわけでない、むしろガラが悪い。

千冬がじっと見つめると、新郎が何か言おうとしている。何度か躊躇して、なんとか口にする。こころなしか、顔が赤い。

「千冬……似合ってるぞ、その衣装……綺麗、だ」

この言葉で、千冬の不安は綺麗さっぱりと、消えた。

次の瞬間、彼女は新婦に抱きついていった。新郎はその細い身体で千冬を抱きとめる。

そして、

「まったく、齒の浮く様なセリフしか言えないのかお前は」

「は？ 言ってる事分かんねえけど……事実だよ」

牧師の神に誓う言葉も待てない！ 私はこの男が愛おしい！
新郎もそうだと言わんばかりに、顔を近づける、真っ赤な顔を。
多分、自分の顔も真っ赤だろう。動悸も激しい、だが悪くない。
千冬は顔をゆっくりと近づける。新郎の顔が近づく。

「好きだ、時世」

「俺も、お前を愛してる」

言い交わした次の瞬間、唇と唇がくっつく。口づけをしたのだ。
鐘の音と、教会にいる

人々からの祝福の言葉が、響く。千冬は今、幸福の絶頂にいた。

「夢か……」

千冬が呟いたのは、起きたのと同時だった。まず眼を開いて真っ先に見えたのは教員用の寮の天井だった。夢に出てきた純白の教会と違ってこっちは少し黒ずんでいる。

身体を起こして自分の格好を見る。シャツにパンツ、といっただらしなさ全開のスタイルである。次に千冬は部屋の中を見る。散逸した着替え、転がっているビールの空き缶。

時世が偶に来てなければどうなってただろうか？ すこし、不安を覚える。

そして、完全に目が覚めると、彼女は顔を手で覆った。

（な、なんという夢を見てるんだ私は！ けっ、結婚式の夢など！）

軽く悶絶ものだ。気恥ずかしさから千冬は枕を手に取り、熱く火照った顔を押し付ける

そしてふと思い出す、時世の言葉。

（綺麗……か。愛している……うあああああああああ！）

あの鈍感のヘタレ王が、そんな事を言うなどありえない、気がする。いや、出来れば、

自分にだけは言って欲しい気がする……

純白のウェディングドレス、それを纏った自分と白い衣装を着た時世。その後、静かな

生活を送る、夫婦となった自分達、そして夜は……

（って、何を考えてるんだ！！）

枕を投げて、かぶり振って忘れる。

……今だけ。

（はあ、とにかく今は支度をしよう）

ベッドから降りて身支度を開始する。IS学園の教師である彼女に、幸せの余韻を味わってる暇は無い。

現実になってほしいな、と思いつつ。彼女は足でゴミをどかしてクロゼットへ向かう。

「で？　いつになったら来るんだ？　アイツは」

空港の出入り口で時世は、これから来る人物を待っていた。

今着ている服はIS学園のもので無い。全身真っ黒に包まれた服装。サングラスをかけ

ており凄みのある姿になっている。背は小さいが。

「もうすぐさ」

同じく黒服を纏った長身の女性。織斑千冬はそんな落ち着きの無い時世を窺める。

黒髪黒目、グラサンに隠れた皮肉気な眼つき。瘦躯の体型の青年。時世はこれから来る

人物を待っていた。

空港の到着ロビーは待ち合わせに退屈しなかった。観賞用のレイアウトが陳列されており

退屈にならない様な心使いがされている。時世はうさぎを象ったレイアウトを眺めていた

これから来る人物と結びつくからかもしれない。

「時世」

千冬の声で我に返る。そう言えば今日はやたら顔をそらす。今も時世を見ずに言っている。

「思い出すのか」

「……」

思い出す事はいくらでもあった、その事に感傷してるわけではない。時世はしばし言葉を溜めて、そして。

「思い出すも何も、俺は一度も忘れた事ねえよ」

「私もだ」

千冬は――やはりこちらを向かずに、薄い笑みを浮かべる。

（忘れられるかよ）

ひとりごちてから、ふと、時世は到着ロビーの玄関口を見る。気づくと、千冬も見ている。

見ると、そこには軍人の様な佇まいの銀髪の少女がいた。

軍服を纏って眼帯をしている。それを見て、相変わらずだな、と苦笑が浮かぶ。少女は

こちらを見つけて、少女は軍人の歩き方で来る。

目の前まで来て、足をそろえてから敬礼する。

「ドイツ軍空軍三佐ラウラ・ボーデヴィツヒ。本日付で、IS学園に着任します」

「かたい挨拶は抜きだ。ここは日本だ、楽にしていぞ」

一気にまくし立てるようにそう言うラウラに、千冬は手を振って遮る。ここまで変わら

ないとは、とまたも苦笑が浮かびそうになる。

「よお、久しぶりだな。ラウラ」

「は、黒兎司令もお元気で」

「もう、俺は司令じゃねえよ」

「ですが……」

「楽しんでいいつったろ。ラウラ」

「はい……父、様」

言うよりも早く、ラウラは時世に抱きついていった。多少面喰ったが、すぐに落ち着きを

取り戻して、時世は何度も父様と言うラウラの頭を撫でる。甘えん坊な娘を抱きしめ、時

世は隣にいる千冬に視線を投げる。やれやれと言った風に見つめていたが、眼が合うとすぐ顔を逸らす。

そんな千冬と、今だ抱きしめてるラウラを見やって、どうしたものかと悩まずにいられた。なかった。

まったく、齒の浮く様なセリフしか言えないのかお前は（後書き）

島田伸介が暴力団と繋がってるって、そんな驚く事？　と思うセキシンです。

最近スクライドにハマってます。カズマかつこいいんだもん。ウチの主人公もあんな風にカッコよくしたいなあ。まあ無理だろうけど。あ、皆さんトランスフォーマー見ました？　面白いですよ。

あと、エヴァの新劇場版、っていうかエヴァの間はじめて見たんですけど、主人公聞いてたより卑屈じゃないんですね。友人談では卑屈で最悪な主人公と聞いてたんですけどね。むしろかつこよかったような……

あと、鬼まり、っていう18禁ゲームが面白そうだから買いたいなあって思ってます。

とりあえずまあこれであとがきは終わりです。それでは、グンナイ。

感想待ってます。

コラボ 時世と流 史上最厄の邂逅（前書き）

今回は白昼夢さんの小説、幻を魅せるISとのコラボです。今回初めてのコラボなんで少し頑張ったけど、なんか滅茶苦茶になってる……

オリ装備なんか多数登場しています。

注意 今回出て来る幻影のオリ装備は、わたくしセキシンが勝手に作ったものですので、本編には出ません（多分）

コラボ 時世と流 史上最厄の邂逅

「……なんだここは」

起き上がり、開口一番に出たのは、疑問だった。

流が今いる所は学園のアリーナの真ん中。どうしてここに？

記憶をたどってみるが、まるで記憶に無い。昨夜は普通に部屋でラウラと寝た筈だが。

——そのラウラもない。

ここにいるという事は、ここに連れてきた人物は学園の教員クラスになる。IS学園の

アリーナは学生に解放されているのは整備室のみであり、アリーナの闘技場には教員の承

認が無ければが出て来れない。今は夜、と言う事は生徒というわけではない。とすると、

残るは教員という事になる。それに流には心当たりがあった、こんな面倒な事をする人物に。

「はあ、いい加減にしてくれ、クロウサン」

「よく分かったじゃねえか」

夜闇から出てきて、月光に照らされるのは黒髪黒目の皮肉気な眼つきの男。小柄な体格

は流と同じ年齢に思わせるが、実際は三十路前。山田麻耶に匹敵する童顔と若々しさを持

っている。が、身に纏っているその雰囲気は織斑千冬と同等。要するに、背の低いヤクザ

が立っているのである。

その顔を、流はここに来る前から知っていた。かつて、両親が集めたIS資料の中に、最重要人物として載っていたからだ。

黒兎時世。流はそのヤクザの名前を胸中で呟く。元ドイツ軍戦術教官にしてIS学園

創設者。その若さで優れ過ぎた能力ゆえに世界から危険視される存在。

（そして、俺の両親の仇の一人でもある）

と、かぶりを振ってその湧き立つ感情を払う。憎しみは捨てたのだから。記憶の中の資料の続きを読む。

ISの開発者、篠ノ乃束と密接な関わりを持ち、IS開発時は篠ノ乃博士の助手までしてた……等々。噂は尽きない男。だが、もっとも有名な噂は、

「女関係のトラブルに尽きない上に色々落ちてる事から、別名落ちるヤクザ^Ⅱ」

「余計な世話だ！ ほっとけ！」

「否定しないんだな」

「うっせえ！」

事実、ここに来てから時世が女関係のトラブルによく巻き込まれてひどい目にあってるのを、流はよく目にしている。学生に落とされた事は一夏から聞い

た。そしてこの男、一

夏と同等に鈍く、一夏が唐変木・オブ・唐変木ズに対し、こっちは鈍感・オブ・鈍感ズ。

または鈍チン兄弟。

どっちにしろ、タチが悪いことには変わりが無かった。

流は溜息交じりで訊いた。

「デ？ 今日は何の用デスカ。クロウさん」

「何の用だあゝ」

ドスのきいた声で、時世は続ける。

「テメエがラウラに何やったか忘れたわけでもねえだろ。テメエは物覚えがいいのが唯一の取り柄らしいからな」

「俺はただやり返したただけだ、キスをな。それとも」

指を唇に当てて、流は意地の悪い笑みを浮かべる。

「初心なクロウサンには刺激が強すぎたかな」

「よし、殺されてえ様だな。覚悟しとけよ、ネクラシスコン小僧」

拳を握って、わなわなと震える時世。その顔は笑ってるのだが、全然笑ってない。

流は俯き、顔が前髪に隠れてしまい見えなくなる。肩を震わせ、顔を上げる。心なしか

いつも無感情な顔には、変化があった。眉根を寄せる程度だが。

「アンタも、今の内に言い訳の一つでも考えておいたらどうだ？
チビヤクザ」

ぴきぴき。その音が聞こえたのは、決して気のせいではないだろう。

時世はいつもの皮肉気な眼つきに似合った、引きつった笑みで言う。

「ほう、どうやら死にてえらしいな。ああん？ ネクラ小僧。暗い部屋で一人寂しく孤独死してろってんだ。一ヶ月後には白骨死体で発見されるんだろうぜ、その趣味の悪いマフラーも一緒にな」

流が時世を双眸を吊りあげて睨む。

「……口の悪さもここまで行けば芸術ものだな。汚い作品だ」

お互い睨み合う。二人のいるアリーナの中心部に、空間のねじりみたいなのが視認できる。お互い、すでにその顔からは表情が消えていた。

「……」

「……」

暫しの沈黙。二人の間を初夏の風が通り過ぎる。海に近いIS学園では海からの潮風が吹いてくるのだが、二人は気にならなかった。ただ、目の前の怨敵

を二人を見続ける。

そして、

「死ね！」

そう言ったのはどっちが最初だろうか。なんにしろ、関係無い。これから始まるのは、

情け無用の殺し合いなのだから。時世の胸——正確には、胸の辺りにあるネックレスだろ

う。時世の胸から極光が放たれる。流もISを起動させる。

黒と白の極光が、アリーナを包む。極光の、発動の○・二秒。流はふと思った。

ISの機体シリアル暗証の最初につけられる「T」のアルファベット。もしかしたらこれは、篠ノ乃東と黒兎時世の子という意味もあったのではないかと。

そんな益体も無い考えを浮かんだ事に苦笑が浮かぶ。やがて、光が消えて——流の目の

前に緋色の装甲を纏った時世が現れる。

対し、漆黒をたたえた色彩のISを纏った流。

駆け出したのは同時だった。互いに声を上げて、フルスロットル全開初動加速で飛び立つ。

がきん！　アリーナ上空に金属と金属の激突音が響く。その次は、声。

「テメエにラウラは任せられねえんだよ！」

「アンタに許しを貰うだなんて思っ
てない」

つばぜり合いは一瞬だった。金属音が消えた頃には、すでに互いに距離を取っていた

——開始から2秒、その間に二人はブレードを展開して初手を出していた。

時世と、流。二人は似通っていた。

使用するISは近接格闘戦特化型。使用装備もほとんどが近接格闘用。

流は両手のブレードを握り直して、眼前に浮かんでいる時世を見て、唱える。

「code”F”00、コール」

——了解 ラジャ

機械音の返答。装甲が変形して、計六機のファングが空中展開される。

「そんなのありかよ……」

「アリだ」

その言葉を合図に、計六機のファングから、ブルー・ティアーズと比べものにならない熱量が時世へ向かう。

黒兎時世は見た目で言えば、特に目立った部分も無い——目つきが悪い事を除けば——

少し若づくりな青年だ。そんな男が、一部では（違った意味でなら広まっているが）魔王とまで呼ばれている。

その事に、時世は特に気に留めていない。ただ、言われてあまりいい気がしない事もある。

ISに関わったのだって偶然だった。思えば、その時から波乱の連続だった気がする。

少々マッドの混ざった幼馴染にひどい目に会わされたりもした少年時代、世間と言う物に散々な目に会わされたりもした青春時代、あとは、まあ、色々あったここ最近。

今もまさに（自分が原因だが、後悔し始めている）その極めつけの様な、厄介な装備満載のISと戦っている。

否、逃げ回っている。

「このびっくり黒マフラー厄介なモン搭載しやがって、ちったあ自重したらどうだってんだ！ たつく心臓に悪いモンばかり使って来やがってそんなモン作る暇があるんならその眼つきをの悪さを矯正しろってんだ！」

毒づきながらも背後への警戒を怠らなかった。

補助ブーストを瞬時展開し、横へ飛ぶ。頬を掠って、ビームがアリーナ席へ直撃する。

ぞっとしながら、うめく。

（なんだこの威力は反則だろうが）

どこまでチートなんだ、あの真っ黒腐れマフラーは！ 声に出すのも惜しく思い、胸中で叫ぶ。ブーストを全開稼働させ、とにかく逃げ回る。ファングはブルー・ティアーズと同系のシステムだろう。脳波遠隔操作式の装備は現段階ではブルー・ティアーズ以外存在はしていない。おそらくファングは現行の脳波遠隔操作式の兵器がさらに発展を遂げたもので、そしてその設計者は間違いなく天才の部類に入る。少なくとも、五指には確実に入れる。

「どうしてこうも俺の周りには天才共が集まりやがんだ」

執拗なビームの嵐の中、剣を収納してまた新たに装備を呼びだす。右手にイオンブラスター、左手にソニック砲。空間歪曲弾と高速弾を備える、それを持つて、意を決して、身体ごと一八〇度回転する。

「こうなりややけだ！ 俺の装備の中で一番威力のある空間歪曲弾と高速弾をすべてテーマに喰らわせてやる！」

そんなやけくその叫びと共に、空間歪曲弾が。

「一斉発射」

ファングからの漆黒色の光が。

「おまけだ！」

泣きの入った高速弾が。

「コール、code”BM”02」

二丁の拳銃型の装備からのビームマシンガンの無数の弾丸が。

「ならばこれだあああああ！」

またもやけくそな、空間振動弾が。

「コール、code”MP”05」

ミサイルポッドからの誘導弾が。

「まだだ！」

物質破壊弾が。

「コール、code”BSR”09」

ライフル弾が。

「おりゃ」

それを潜り抜けての素手の一撃もまじりつつ。

そして――

気がつくと、すでに装備はほとんど尽きていた。ずっとやけで撃ち合ってたのだが、ど

うやらお互いに殆どの武器を失ったらしく、見ると流ももとのブレ

ードを二本手にしているだけで、もうファンクも浮いていなかった。

肩で息しながら疲れたように流が訊く。珍しい表情だった。

「何度か死ぬかと思ったぞ、何なんだあの空間歪曲弾と言うのは。広がる様に爆発したぞアレ」

「いや、絶対防御ごと——ていうかISも丸ごと空間の歪曲によって生まれる反動の歪みに巻き込んで一気に爆散させるってだけだが」

「死ぬだろうが」

「安心しろまともに食らっても精々脊髄損傷程度だ、ちゃんと遺体は残るから心配しないでいいぞ」

「何をだ！？ 殺す気か！」

「何を言う、人の娘に無理やりキスする様なロクで無しの変態真っ黒害虫ヤロウはな、と」

つとと死んで三途の川で渡し賃払って地獄で閻魔様にでも詫び状書いて延々と苦しんで当然なんだよ。さあ、早く死ね、今すぐ死ね！」

「この凶悪ヤクザもどきめ！」

珍しく、わめく流を眺めてから時世は不敵に笑みを浮かべて流を睨み据える。ブレードを展開して。

「これでめえも武器はねえだろ。負けを認めたらどうだ」

もっとも、俺もこれ以上はきついんだがな。声に出さず、そう呟いた。

時世が出す、その提案に流は答えない。かわりに。

「code”M”^{ドライブ}発動」

ぱりっ、通電音に似た音が鳴る。突如として夜が消える。否、消えてはいない、照らされてるのだ。何に？ 俺だ。

身体を纏う電気の鎧。それが夜闇を照らす圧倒的な光の正体だった。

code”M”00。マフラー型装備に蓄えられた電気を一気に放出、それを駆動部の電気伝達部に伝う事で、超加速を得た幻影が、まるで幻影であったの様に消える。

びゅん、音速を超える超加速。ただ、剣を向けて進むだけで相手を倒せるシステム。流は時世へ向かう。

当然のことながら、それを知覚する事は誰にもできない。目に捉え切れるスピードでない物を捉えるのは不可能に近い。超

加速の弾丸は時世の装
甲——焰神を捉える。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。幻影が電気を纏ったと思ったら、いきなり消えたことぐらい。だが、確かなのは今自分が何かに攻撃されて落とされたという事。

「ぐはっ」

内臓が揺れる錯覚。軋む身体に制動をかけて、着地点を探る。衝撃で動かない手に頼るのを諦めて、PICを全力稼働させるが、衝撃を全て和らげるのは至らなかった。どうか、足首と膝で衝撃を受け流して勢いを殺して着地する。

（何があった？　今、俺は何をされたんだ？　やられたのか？）

全身に亀裂が走っている。それで疑問が氷解する、やられたのだ、超高速の一撃で。

ふと、その気配に気づき、時世は天を見上げる。流がいた。黒の機体には電気を帯びており、その色は金色に近い。時世は内心毒づく。

（くそっ、まだあんな隠し玉があったのか）

思わず舌打ちをする。あの頃の自分——龍神を駆っていた頃の自分なら——龍騎士ならば、こんな無様な事にはならなかった筈だ。少なくとも、クソガキにここまでやられる事は無かった。

今は何も持たない右手を握り締める。剣はもう失った、今残っているのはこの胸にある物だけである。

飛びあがって、流と同じ位の高さまで上がる。

「くそつたれが、年寄りをいたわる気持ちかねえのかよ最近のガキは」

「アンタ今は学生だろ」

「ごもつともだよ、こんちくしょう」

腕にブレードが展開される。目を閉じて、呼吸を整えてから、時世は唱える。

「——鏖」

ブンッ、つんざく様な振動音が響きわたる。

精神感應式超振動鋼音波ブレード——あらゆるもの、ビームをも切り裂く事から略称は

みなごろし

——鏖。これが、装腕部装着式ブレードの正式名称。

びゅん。またあの高速音を聞いた時、すでに流が眼前に迫っていた。

がきん、とっさに振り上げた剣と電気を帯びた剣がぶつかり、時

世の剣が流の剣を粉々に砕く。ブースターを前進させてそのまま突っ込んでみるが、またもや消えた。

塵が解除される。超振動の刃は、何でも切り裂く刃は長時間稼働し続けると、刃から装甲へ、自己崩壊を起こす。

（せいぜい持って一日五分ってところか）

機体の状態を確かめる。早速、機体は反動で崩れかかっている箇所がある。自己修復機能でまだ、可能な範囲だが、このままにしても置けない。ケリを早く着けなくてはいけない

（果たして、着くかどうか、だな）

と、同時に、ブーストを展開して後ろへ向き直ってブレードを構える。それに応じるかのように、電撃を纏った金色の幻影が出て来る。同じく、金色に染まったブレードを振り下ろしにかかって来る。それを受け止める。そして、消える。

消えては現われ、現われては消える。といった単純な動作を光速で繰り返す幻影。それを勘で受け止め続ける焰神——時世。

切っ先と切っ先がぶつかり合い、鋼の削り合う激音が何度も響く。時には背後から。またある時は上から。四方八方から、光速で繰り出される斬撃の嵐の渦。

時世はなんとか凌いだ。

（このまま勘で捌き続けてたら確実にやられる。長くは持たない。

悠長に解除するのなんて待ってるのは危険すぎる！)

かと言って、麿は多用できない。一撃必殺の刃はどんなものよりも強い、が、同時に重
いリスクを伴う。諸刃の剣――それが麿。

稼働時間の残りは三分ほど。これで仕留められるか？

頭の中で算段を立てる。数秒ほど要して、時世はにやりと笑みを浮かべた。

(良い考えがある)

……………。

(………?)

今、何かフラグが立った気がしたが、無視する。

今度は、前面に現れた幻影に思いついた手を試す。焰神の装腕を外して幻影へ放り投げる。

流の反応は迅速だった。その装腕を打ち払って、そのまままた光速で斬りかかるつもり
だろう。流の剣の動きが、投げた装腕と重なる直前に、時世は叫んでいた。

「麿！」

ぶんっ、超振動が鼓膜を揺らすのが分かった。

超振動の剣を構え、幻影へ、イグニッションブーストで一気に接近する。隙が無いのな

ら自分で作る。装腕は、流の注意を引く為の布石だった。

装腕を斬ろうとする、流の剣を砕いて、完全にながら空きの幻影へ飛びこむ。そして、一気に突き刺す。

が――

「甘い、非常用code”ARM”セカンド・アーム。コール！」

突如として、幻影の背中部から二本の装腕が現れる。掌を向ける。両の装腕の掌からビーム砲が覗く。

そして、アリーナ上空に赤黒い爆発が起こり、全体が爆煙に包まれる。

煙が晴れた後には、何も残らなかった。――いや、微かな燃えカスが二つだけ残った。

「クロウサン、あの剣は何だったんだ。凄まじくよく斬れていたが」

「ああ、あの剣は、まあ、なんつか、零落白夜みたいなもんだ。アレはエネルギー体な

ら何でも斬り裂くだろ。塵はそれを簡易化したものでブレードを振

動させることで物質を崩壊させるんだ。零落白夜にたいに単一機能じゃないからそんなに使用はできないけどな
長時間使うと超振動の反動で自己崩壊をおこしてヘタすりゃ細胞分解まで起こして死ぬし
な」

「何とも言えない武器だな」

包帯まみれの二人は、しみじみとそんな話を話あっていた。
そんな二人を、米神の辺りをぴくぴくさせながら千冬が睨んでいる。三人がいるのは、
学園の――拷問部屋とも言われる――生徒相談室だった。

「アリーナ全壊か、やってくれるな貴様ら。お陰で私の仕事も楽になった、礼を言わせて貰おうか」

千冬はにこりと微笑みながら、皮肉を漏らす。

「褒美はなにがいい？　言ってみろ。そうだな、私としては地下の侵入者用の独房に入って臭い飯を二週間ずっと食わせるコースと、手足縛って甘い蜜を塗った足にアリが群がってくるコース何かがお勧めだが。文句はあるまいアリーナを全壊させたのだからな」

「今日はいいい天気だな」

「そうですね」

二人は世間話を続けている。千冬はそんな二人を気にも留めずに続ける――笑顔のまま。

「請求額はおって伝える。それまで拷問コースを堪能してるといい」

後に、この事件は、第四アリーナの悲劇として語り継がれる事になったと言う。

コラボ 時世と流 史上最厄の邂逅（後書き）

没装備

思いついたのはいいけど、結局使わなかった装備。

反転code”M”

バイザーに仕込まれた機械による外部から脳への刺激で、脳内ホルモン―エンドルフィンの分泌を爆発的に高進させることで、人間ではありえない動き、知覚、すなわち集中力の増加により全ての面においての異常な能力を発揮できるようになる。だが、あまりに長くホルモン分泌を行うと、内臓が腐敗現象を起こし死に至る。発動条件は、搭乗者の戦意高揚と機体損傷が90%を超えた時。

code”H”（ハーミット）

可視光線を歪め、レーダー波を吸収するガス状物質。これを磁気で機体周囲に纏うことにより、視覚的及び電波的にも自機存在を隠匿することが可能。水中ではコロイド粒子が流出してしまうため使用不可能という欠点がある。

簡単に言うとミラージュコロイド。

焰神 オルタにティ

大きく形状を変えた、焰神自身が自分の身体を再構築して作った形態。胸のマトリクスから供給されるエネルギー伝達により精神感応式稼働部の反応速度の誤差を0にする事を実現させた機体。誤差0により、ほぼ自分の体と変わらなくなる。正に一心同体。速度も重力制御と空間制御により眼にも止まらぬ早さで移動できる、というか、空間と空間と繋げる事も出来、殆どワープに近い。

だが、あまりにもISと同化している形態なので、ISに与えられるダメージは操縦者に幻痛として伝わる。絶対防御により生体は守られているが、脳と精神は守られていない。ので、使いすぎると精神崩壊を起こしてしまう。

あらゆる空間からレーザーを放てるカノン砲を両腕に装備している。あらゆる距離、場所も無視する、超遠隔射程武装。

最後に、白昼夢さん。コラボありがとうございます。

もしも〇〇に転生してたら(前書き)

台風に何度か飛ばされる所だった……

もしも〇〇に転生してたら

もしもリリなのの世界に転生してたら。

魔法世界ミッドチルダは、首都クラナガンに時空管理局地上本部も構えてる魔法都市で

ある。魔法が最も栄える魔法文明都市、その町並みはその名に相応しく、壮麗であった。

並木のプレートは、この世界特有の文字で書かれている。読む気も起きず、素通りで道を歩く。

黒髪黒目、少々華奢な体つきだが、戦闘訓練によって決して弱々しさが無く、鋭い刃の様な気配を纏っている。入局からもう二年過ぎているが、いまだに制服が身体に合わない引きずる様に、歩く。

向かう先には、巨大な建造物があった。それこそ、ミッドの防衛の要、地上本部だった

「で？ 何の用だよゲンヤ」

「貴様は礼節というのを知らんのか？ 若造」

「生憎とタヌキに対する礼節は学ばなかったな」

皮肉気に笑みを浮かべて、挑発的に睨む。そんな時世にゲンヤは
はあ、と溜め息をついた。

「非番だったのを起こしてすまんかったと何度も謝ってるだろ」

「その前までお前の部下のポカの後始末したんだがな」

さらに双眸を吊りあげる。108部隊の部隊長は机の中から何か
を取り出す。時世は訝
しみながらもそれを受け取る。便箋の封筒だった。

「なんだよこれ」

「辞令だよ。お前さんには機動六課に行ってもらいたい」

「機動六課？ 聞いた事が無いぞそんな部隊名」

「ああ、お前は最近まで駐在任務についてんだ知らない筈だ。
とにかく詳しくはそんな
中に入ってるから目を通してみろ」

封筒を開けて資料を読みあさる。

おおまかにだが、読み取った情報を頭に列挙する。機動六課、ロ
ストロギアの対策を是
とした新興部隊。どの部隊よりも先にロストロギアの確保、調査、

つまりは危険物専門の

部隊。だが、時世が何よりも目を引いたのは、これだった。

部隊長、八神はやて。分隊長、高町なのは、フェイト・テストロ
ツサ・ハラオウン。

「へー、結構な有名どころが揃ってるんじゃないか」

「それだけか、変だと思わないのか？」

「別に、俺がどうこう言う問題じゃねえだろ。まあ、確かに陸から
とかうるさそうだな。

レジアス中将なんかうるさいだろうよ。しかし、ギリギリの部隊
だな」

胡散臭い部隊。率直な感想がこれだ。

過剰戦力はもとより、発足理由もだ。確かにロストロギアの対応
には、管理局はその巨

大さゆえに後手に回りざるを得ない。それは分かるのだが、

(きな臭えんだやなどうも)

顎に手を当ててふと、思う。先ほどの三人、地上でも有名であり、
時世も多少は知って

いる。それに、

「それにお前さんも地球出身だしな」

時世の胸中を代弁するようにゲンヤが続ける。その事を誤魔化す
様に時世。

「んなこたあどうでもいいんだよ。で？　いつ行けばいいんだ」

「ああ、悪いが今すぐで頼む。もう先方には言っているからな」

「用意がいいな」

そう言い残して時世は、108を後にしようとした。その時。

「時世さん」

名を呼ばれ、振り向く。一瞬誰かと訝ったが、

「ギンガか」

ますます似てきたな、と思う。両親に。

皮肉気にそう思いながら、ギンガへと向き直す。

「久しぶりだな」

素っ気ない、そんな返事。だがギンガはそんな時世の態度も気にしない。

「今まで何で連絡くれなかったんですか！　スバルが心配してましたよ連絡の一つくらいしてください。私だって、心配してたんですから。こっちからも連絡できないし」

「あー、悪かったな」

「悪かったなじゃありません！」

「それじゃあ、俺は忙しいからまたな」

そう言い残し時世は転移魔法で移動する。去り際に何か聞こえたが、分からなかった。

八神はやては悩んでいた。

機動六課の部隊長である彼女には、悩む事はいくらでもあるのだ。それこそいくらでも

だが、今回は違った。108から出向してくる人物についてである。

「黒兎時世。出身地球、それ以外は一切不明。孤児か。17の頃に次元犯罪者を捕まえた

ことで管理局に入る。魔力が少ないのにも構わず何人もの魔導師を

倒している。どれもA
ランク以上で、なかにはSもおるやんか！」

そしてそのどれもが素手。さらに続きを読む。

「なになに、特殊な拳法をつかう……なんか、すごいなあ」

「はやてちゃん何を見てるのですか？」

「あ、リイン」

肩の所に浮いているユニゾンデバイス、リイン・フォース？が、はやての持つ資料を覗く。

「誰ですか？ この子？」

この子か、くすりと笑う。リイン、この人はこう見えて私らと同じ年なんよ。

確かにこの写真の彼は幼い容姿をしている。見た所十五くらいだろう。黒髪黒目、一般的な顔の造りなのだが一度見たら忘れそうにないだろう、鋭く吊り上がった目をしている

「この子はな、今度うちに出向して来る人でな、ゲンヤさんからの紹介なんよ」

「ゲンヤさんの」

ゲンヤには昔、世話になった彼女は、立場が逆転した今でも彼を

師とあおいでおり、ま

た、このラインも彼を慕っている。

そんな彼からのこの申し入れは正直うれしいが。

（魔力ランクが低いのに、この業績は凄いいけど何やウソ臭いなあ）

昔、彼女は108にいた事があるが、彼を見た事は無い。ゲンヤによると任務に行ってたと言うが。

（過去の事も白紙同然で、ゲンヤさんには悪いけどあやしいな）

彼が騙されてるといふ線もある。なにしろ、この男、過去がまるで無いのだ。

（まあ、しばらくは要注意といったところかな）

そこは墓標、かつての友が眠るそこに彼はいた。右手には彼と彼女のイメージに合う花束を持って、逆の手には酒。彼は酒は好きで無い、だが、あの墓標の下に眠るあいつはよ

くこれを飲んでいた。二児の母のくせに。

ソイツの墓地の前に着く。思えば、こいつが死んでから自分は管理局員になろうと思ったのだ。

花束を置いて――これを見たらアイツの事だ、皮肉のつもりか？

と言うだろう――酒

びんを開ける。墓石の上からかけて、そのまま見下ろす。

（遺体がねえんならここに来る必要なんかねえだろ）

皮肉を浮かべる。自分自身への。

遺体の無い墓地。この墓の下に眠る筈だった人物はどこかに眠っている。そうとも思

わなければ、自分はこの墓を認める事も、あいつの死も否定してしま

そう言うわけにはいかない、微かな希望にすぎるほど、彼は強くなかった。

もし、東方の世界に行ったら。

がたん、がたん。

あなたはだーれ？

俺？ 俺は旅人さ。はぐれ旅を続けるしがない旅人さ。

何処へ行くの？

旅人にそんな質問するのか？ それは野暮ってもんだろ。

がたん、がたん。

そんな音を背に、時世は荒野を歩いていった。黒髪黒目、皮肉気な容姿の華奢な男が、歩を進めている。

音が止んだ。

後ろを向くと、そこには荒野が広がっているだけ。それを眺め、ふと笑う。

「どこでもいい。とにかく遠くへ行くか」

どうせ長くは続かない旅だ、それなら遠くへ行ってもいいだろう。時世は、振りかえってまた歩き出した。

彼女は理解できなかった。

何故自分が追われているのか。ただ、妖怪と言うだけで安住の地は無く。彷徨う事が宿命何たる皮肉か！ 古来、人間よりも深い知識を携え、人間よりも遙かに力を持つ妖怪。だが、人間に劣る部分が一つ存在していた。

繁殖能力である。彼ら、人間はそれを武器に増え続け、やがて人間は妖怪の手から自由となり、逆に支配し始めた。

彼女もまた妖怪であった。種族もはっきりしないはぐれ妖怪。ただ、一人で旅する彼女生まれて間もない彼女は、生きて行く術に長けていない。だから、人間には見つからない様に生きてきた。

だが、油断した。

人間達が妖怪狩りをしているのは知っていた。知っていたのなら、警戒すべきであったが、もうすでに遅い。

彼女は目の前に迫る人間に恐怖した。腰が抜けていて、もう動けない。とても人間から逃れそうにない。

「追いつめたぞ、妖怪め。人間みたいな姿しやがって。テメエらごときが人間に化けるな

んぞ恐れ多いつてんだ！」

桑を持った男がそう声を張り上げる。

「覚悟しろよ。妖怪め」

桑を持った男を皮切りにさわさわと声上がる。

この人間達は近くの村の農民だった。近頃の干ばつで彼らは危機的状況にあり、それを

妖怪の仕業としているという。

だからか、彼らの眼には憎しみと何かを求める感じがあった。

だが、彼女には殺されるいわれは無い。残った力で逃げる。が、すぐに捕まってしまう

「この化け物、往生せいや」

「大人しく殺されろ」

もう終わりなのだろうか、愚かな人間にいい様になぶりものにされて殺されるのか。屈

辱であった。なぜなら、人間に殺される事は妖怪にとって最も恥ずべきことなのだから！

目を瞑る。目の前にしが迫ると、妖怪も人間も関係なくなるらしい。恐怖を和らげよう

と、目を瞑ってしまう。なす術が無いのなら、せめて視覚からの恐怖だけでも無くそうと

いう、精神的な魂胆なのだろう。

そう考えると、人間も妖怪もそんなに差は無いのだろう。

妖怪は死なない。これは誰が言ったのだろうか？ 妖怪には明確な

死は無い。だが、その

存在の楔が無くなれば、妖怪には死よりも恐ろしい滅び。つまりは消え去るのだ、記憶からも。

おそらく自分はこの後、その楔すら失う程、傷めつけられるだろう。彼らが彼女に対する恐怖が完全に消えた時、消え去る。

意外と、死は安らかだった。痛いと思っていたが痛みは無い。これが死なのか？

ふと、頭に何かがのっかる。彼女は訝った。

——これは人間の手。
目を開ける。すると、

「お、生きてたか。目開けないから燃やす所だったんだが、しょうがない、中断しよう」

何やら不穏当な事を呟く。眼つきの悪い男が、重なるように倒れている男達を背に、彼女の頭に手を乗せていた。

もしも〇〇に転生してたら（後書き）

息抜きで書いてみました、もしものコーナー。ドリフを見てたら何となく思いついて書いて見ました。

時世がなのはの世界にいたら何かナカジマ家が一番しつくり来る気がするんですよね、なんか姉妹に振り回される主人公って感じで。

あとは東方ですね。こっちはあんまりストーリーが浮かばないんであまりやりたくないですね（笑）

イメージとしては、旅人みたいな感じですね。銀河鉄道の夜みたいな。まあ、読んでないからわからないんですけどねー。

まあ、そんな感じにしたいから、最初の方に電車の擬音をいれたという。

相変わらずのセキシンの力技てきな無理やり小説でした。こんどまた、気が向いたら書きたいと思います。

もしも〇〇に転生してたら2（前書き）

第二巻編ですが、少々気に入らないというか、何と言いますか……
とにかく修正します！

皆さまには多大なご迷惑おかけしてすみません。

その代わりと言っては何ですが。前々から溜めてたネタ？ を掲載
しますのでそれで御許しを。

もしも〇〇に転生してたら2

もし、銀魂の世界に転生してたら

「いい天気だ。こういう日はいい男は働かなけりゃならん」

曇天の空を眺めて、時世は呟いた。はあ、と曖昧な合いの手を出す背後の少年に向けてまた話出す。

「俺なりに考えたんだ。何故堕ちたのだろうか――それはまず、選んだ仕事が悪かったんだ。そして、何よりなのは、貸した相手がそろいもそろって馬鹿だって事だ」

「それだけでしょうか？」

ぽつりと少年が呟いたその言葉を無視して、続ける。

「だが、過去はもうやり直せない。つまりだ、ここから先俺が幸せを掴む為にはあの連中と手を切ってしまう事だ。それにはまず金を徴収せねばならない」

そして、ようやく時世は背後の少年へ向き直る。真剣な面持ちで告げる。

「新八君、俺の幸せを掴む為に協力してくれ」

「縛りつけといて何言ってんだアンタ！」

公園の真ん中に位置する銅像。この地を開いた徳川家康をたたえる像、その足元の台座にロープでぐるぐる巻きにされている新八が叫ぶ。周りには野次馬が集まり、何事かと騒いでいる。

事も無く時世が言う。

「そうか協力してくれるかありがとう」

「すずしく言っていないで早く解け鬼！」

「何言ってんだ？ 鬼ってのは人を不幸のどん底に叩きおとした挙句にその様子を見て

笑い転げて、そして飽きたらそのままほったらかす奴を言うんだ」

「何でやけに比喩的なんですか」

「大体な、本来ならテメエら全員皆殺しにしてあの犬——貞治だけ『定春です』その定

春の肉を肉屋に売り飛ばしてもいいんだぜ。無論、それだけでなくお前から勿論金

目のモン——お前の場合のはあの道場だな——ふんだくるが」

「あんた今、人間として最低な事言ってますよ！ 時世さん目を覚ましてください金ごときで正気を失わないでください！ だからお願いこのロープはずして！」

「金払うってんならな。あとな金を返さねえ奴は人間気取りしてんじゃねえ」

と、言いつつ、時世はあたりを見渡した。公園の真ん中でこんなに騒いでるのだから、野次馬はかなりの数が集まってもいいのだがあまりいない。大体が素知らぬ顔で通り過ぎる。

一回り見終えたその時。

「あれ？ 兄弟じゃないですかい」

前の方から聞こえる声に時世は反応した。茶髪の少年が片手を上げてこちらへ来る。

「沖田か」

「沖田さん助けて！ 今この凶悪借金取りが僕を殺そうとしてるんです」

「またサボってんのか」

「いやだなー、人聞きの悪い事を言わねえでくだせえ。シエスタですさあ」

「無視すんなコラ！」

「人はそれをサボりつつーんだよ。まあ、それで苦勞すんのはあの黄色いのだからどうで

もいいが」

「兄弟もわかってんねえ」

「オイコラ警察！ クソドS兄弟いい加減……」

「黙れってんだこのメガネもどき！」

そろって怒鳴り、そして一斉に拳大の石を新八の顔面に当てる。
銅像からは血の滴る音
と眼鏡の落ちる音が同時に鳴った。

「そう言えばこの間兄弟から買ったリッパークン。少し調子悪くなりましてねえ。土方さんの鼻毛、うまく取れないんでさあ」

「それじゃあ今から修理に行つてやる。あんまり使いすぎんなよ」

「助かりますぜ兄弟。金は……」

「いんやタダにしといてやる。取ったら後が怖いんでな」

「助かりますぜ。じゃあ行きましょう」

そう言って、すたすたと歩いていく。

「ちょっと待てえ！ 俺を置いて行く気かああああ！」

ぴたりと足を止めて、時世は新八に向き治る。そして指を指して言う。地面に当たって

ひび割れた眼鏡に向かって

「何言ってやがんだ新八。もう縄から逃れてんじゃねえか。台座なんかほつといてさっさと帰っていいぞ。俺もメガネの相手よりもマトモに金払ってくれる顧客の方が大事だからな」

そう言って、今度こそ時世は去った。入れ替わりにやって来た通行人が新八を踏んでいく。

銅像にロープで縛られた台座は叫ぶ。

「くそつたれがああああああああ！」

その後、たまたま通りかかった近藤に救出されるまでの数日間、台座はそのままだった

対 夜王

「ほう？　ワシの鎖ちぎれるとでも言うのか？　このワシ夜王の鎖を！」

雄叫び。その声を聞き、時世は身体すくみあがるのを感じた。脳が彼に訴える、逃げろ
全力でここから逃げ出すんだ！　逃げる術が脳内で構築される、が、

そのどれもが敗れる

のが容易に分かる。と、同時に理解する。こいつはこの場にいる中で俺にしか倒せない！

「逃げるのを諦めたのか？」と夜王が挑発的に、笑みを浮かべる。支配者の笑みを。

「ああ、そうだ」

嗤う。夜王が嗤う。その眼に負け犬への憐れみが無い。時世は素直に思う。さすがは夜王、それでこそ王を名乗るのに相応しい！　だが――時世はかぶり振って告げる。死刑囚の様な気持ちで。

「だから倒す事にしたよ。あんたを」

刹那。

真正面に捉えてたはずの夜王が突如消える。そして、夜王の姿が時世の眼に現れた頃に彼が消えた理由を悟った。ああ、消えたんじゃない。移動したんだ。ただ、単に。

晴太――だったか？　呼び声がやけに遠くに感じる。耳が塞がれてるからか。何に？　聞くな、夜王の手だ。

夜王の右手が、時世の頭をわし掴んで壁に叩きつけていたのだ。

夜王の嘲笑。そして声。

「ワシを倒すだと？　そんな体たらくでよくもそんな戯言を言えたな、敬意に値するぞその愚かしさは。だが、我ら天人から国さえも守れない侍に我が鎖を

断ち切ることなどでき
る筈もなかったのだ。獅子は縄張り争いに負ければ縄張りと共に己
の保有する雌を明け渡
す。わかるか？ 貴様ら侍にはもう居場所もその手で女を抱く権利
もありはしないのだ。
——とつくの昔に、国も、メスも——皆、天人のモノになってしま
ったのだから」

嘲笑は止まない。暗くなる意識の中でなお、夜王は時世に語る。

「そう、この吉原も、吉原の女も、日輪も、全てこの夜王のモノ。
奴らはワシの鎖に繋が
れた飼い犬だ。何処にも逃げられはせぬわ。そして貴様ら敗者にこ
れを止める権利は無い
悪いのは何も守る事が出来なかった貴様ら弱者なのだからな。敗者
は敗者らしく指をくわ
えて見ておればよいのだ。この国が、女達が、我ら強者に蹂躪され
る様を。そう——」

静かに付け加える。

「先に行った弱者達と一緒に——あの世でな」

と、ここで夜王は時世を掴んでいる手に力を入れるのだろう。握
り殺す為に。

だが、彼は出来なかった。夜王が珍しく、その余裕を纏ってた顔
に動揺を見せる。まる

で失脚の王の様な——表情を見せる。夜王が喚いた。

「きさ、ま！ 何をした？ ワシの腕に何をしたんだ！」

動かない腕を時世から離して、恐れ慄く様に下がります。一步、一步、また一步と。四歩目で止まる。同時に時世が呟く。

「誰が負けたって？ 何を守れなかったって？」

夜王の手から自由になって、身体に乗った瓦礫をどけてから、ふらっと立ち上がる。血

が滴る音が聞こえる、誰よりも近くで。全てが遠ざかる気がする、が、何かがつなぎとめている。だからそれを失うな！ じゃなければ俺は確実に死ぬんだ！

——そう、死ぬんだ。時世は反芻した。

正気ではない、そう、夜兎族に挑むなんて狂気の沙汰にしか思えない。時世は皮肉気に

そんな事を浮かべた。宇宙最強の戦闘民族”夜兎族”。

戦場で出会えば、それは最悪で無い。する事など無い。その後にあるのは二つだけ——

痛みを感じない死か、痛みのある死。それだけであるという。

夜王の腕が回復したようだ、夜王は腕の肘に刺さっていた毒針を抜き、即座に毒の進行を抑えた。

時世は声を段々と高くさせて、続ける。

「奪うだあ？ 誰に向かってほざいてやがんだゴリラジジイが。弱者だあ？ 言ってくれ

やがって。なら、俺に負ける確定のテメエはなんだ？ 俺の足下で無様にテメエの粗末な

モンにすがって握ってる哀れな猿か？ なら、そんなジジイが夜王

だってんなら、俺は」

言葉を紡ぐたびに意識が冴える、刃に鋭さが増すように、あらゆる術が浮かぶ。無論、それはこの男を殺す為の無限通りの術。

「魔王だ」

「貴様！」

顔を赤く紅潮させて夜王が怒鳴る。時世は拙い構えを取って、夜王を睨み据える。

「俺を殺したいなら、貴様も殺す気で来い。さもなければ、俺が前を殺す」

くおまけく

「うふ、銀子でーす」

「ズラ子でーす」

「それいけ酢昆布ミサイル！！」

「ぎゃあああああ！」

「いきなり何すんのよ！ あんた！」

「黙れ怪物ども！ 悪を滅ぼすのは正義の務め！ そして悪は俺と言う正義によって滅びる事になってんだ！」

「女の子投げ飛ばしといてよくそんな事言えるわね！」

「ふん、貴様らを殺して得られる悪行なら俺は喜んで背負おう。悪を持って悪を殺す！」

「かつこいい事言ってるけど。目に焦点が合っていない上に、やってる事は悪じゃなくて外
道だからね！ 悪よりひどいからね！」

「言い残す事はそれだけか？ 覚悟しろ」

「冗談じゃないわよ。歌舞伎四天王の怖さ、アンタみたいな若造に教えてあげるわ」

「はっ、化けモンがほざいてんじゃねえよ。てめえからみれば人類すべて若造だろ？」

「若造が、後悔しても知らねえぞ」

「てめえも整形手術の予約と取つとした方がいいじゃねえか？」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「死ねえええええ！」

設定としては、時世は万屋にお金を貸している借金取りですね。それで毎回収の度に江戸の街が銀さんと時世の破壊活動と言う名の取り立てで壊れまくるという、こんな感じですね。ちなみに、銀さんとは攘夷戦争では仲間でしたが、金を返さないから常に仲悪いです。銀さんは「極悪借金取り」と、時世は「万年プータローの若白髪男」と罵りあってます。ちなみに異名は、やっぱりというか、「魔王」です。

恋姫

「んで？　これはどういう状況なんだ？　おいそこの」

「へ、へい」

しこたま殴られたのか。殆ど原形をとどめてない男は、はれ上がった顔のこれまたはれ上がった唇からゆっくりと声が漏れる。

正座してる三人の、そのなかでおそらくリーダー格と思われる男に時世は訊く。

「まずここはどこか言え。詳しくだ。ふざけた事を抜かしたら――」

一拍置いて、時世は続ける。

「殺す」

「へ、へい！　ここは幽州と言いまして、公孫賛が治めてる……」

「おい」

力強く地面を踏んで、時世は男へ詰め寄る。

「ひゃい！！」

「寝ぼけた事ほざいてんじゃねえぞ、こら。俺を舐めてんのか？
今すぐこの場で八つ裂
きにして野良犬の餌にしてやってもいいんだぜ」

先ほど盗った剣を首に当てて、男を見る。

「う、嘘じゃねえです！　本当です！」

涙交じりにそう懇願するように言う男を眺め。時世は舌打ちをする。

（ふざけんじゃねえぞ。じゃあ俺はタイムスリップしたってのか？）

見渡す限りの荒野を見ると、否定の意志が薄くなる。少なくとも、
ここは日本ではない
吹き抜ける砂塵が手に触れる、砂の細かな粒子が手をすり抜けて行く。

まさか、本当に？

その瞬間。時世は横に跳んだ。頬を搔っ切る様に何かが通り過ぎ
て行き、地面に当たる
赤い槍が刺さっている。

「誰だ？」

振り向き、槍が飛んできた背後を見やる。男達が逃げて行くが、
そんな場合ではない。

気を抜けばやられるのは俺だ。

微弱な殺気をさっきから感じていて多少は警戒してはいたが、

（こんなに大胆に来るとはな）

「ふふ、やるなお主」

と、現われたのは女だった。妖しげな美しさを持ったような女。
卒直にそう思った。

「誰だ、君は？」

「これは失礼した。私の名は趙雲と言う。主は？」

調子狂いながら、時世は名乗る。警戒は解かずにそのまま。

「黒兔時世」

「時世か……一手仕合してもよろしいかな」

「いやだね」

「何故かな？」

「俺に理由が無い」

「成程、ですがこちらとしても是非に戦って頂きたいのですよ」

女――趙雲の雰囲気が変わった。肌で感じ取れるほどの殺気が、時世を襲う。

そして、向かって来るだろう趙雲を迎える構えを取ろうとする――が、構えを解き、即座に身を屈める。頭上を掠る様に何かが後ろから通り過ぎて行く。時世はそれが何なのか

真っ白な意識の中悟った。あれは槍だ。握り手の部分に微かに糸の様な物が見えた。

そして槍は趙雲のもとへ戻る。

（くそつたれ、奇襲みたいなもん使いやがって。やりにくい奴が来たもんだぜ）

立ちあがって体勢を直そうとするが、遅い。趙雲はすでに来ていた。槍を斜め上からす

くう様に、迅い突きが迫る。

立ち上がるのを諦めて、右手を軸にして趙雲の足へ蹴りを入れる。それを読んでいたの

か彼女は即座に身体を制動し、大きく跳躍する事で回避する。

（迅さにならこっちゃだっただよ）

空中に漂う趙雲。その隙に体勢を直して、足下にあった石を趙雲

へ向かって投擲する。

趙雲は、身体をひねって石をかわす。

ひらりと、着地して槍を構える。

「なるほど」

女が呟く。

「思い切りのよい戦いだ。先ほどの石、本気で殺す気で投げましたな。正確に眼と心臓に向かってきてましたよ。それに動きも早い。女相手に手を上げるなと恥ずかしくないのですかな」

「ねえな。武器持って襲いかかってくるような危険な女には対してはなおさらだな。そんな奴に女も男も関係ねえだろ」

（ま、かわすとは思ってたけどな）

声に出さずに付け加える。だが、女はそんな時世の心の内を読んだかのように微笑を浮かべる。

「ふふ、それもそうですね。どうやら貴方は一筋縄ではいかないらしい。成程、聞いたとおりの人だ」

槍を、突きの体勢で構える。

あの早さの突きを回避する事が俺に出来るか？ 先ほどの勘で

避けていたにすぎない

同じような奇跡が続くと、そんな都合のいい事は考えちゃいない。槍を引いて、趙雲が躍りかかってくる。

真つすぐ、だが、迅い。小細工を抜きにした高速の突き。一撃のもとに殺せるであろう

それが――脅威が迫る。

捉えたわけもないが、時世は駆け出した、前へ。

（これも勘だ。これが外れれば俺は死ぬ！）

そして、突き出した牽制の左手が槍の柄の部分に触れる。

（ここだ）

槍に当てるように左腕を上げる。腕は痺れたが、時世は無然無視して右

拳を脇へ当て、後ろにあった左足に勢いをつけるように、回し蹴る。

趙雲

はそれを受け、吹き飛んで行った。

流石に二撃も急所に喰らって、趙雲は立ち上がる事も無かった。

だが、のた打ち回って

いる所を見ると、気絶はしなかったようだ。あるいは出来なかったのか。

そして、蹴りの衝撃で上へと飛ばされた朱色の槍が時世の前に突き刺さる。それを抜い

て、彼は先ほどから『趙雲』と名乗る彼女に歩み寄った。

言ってる事と自分の推測を確かめる為。

「おい、お前。趙雲と言ったな。それはもしかして趙子龍のことか？」

仰向けにひゅー、ひゅーと、肺から呼吸しながら、彼女は答えた。

「いかにも。やはり貴方も私を知っていた。天の知識を有しておられた。あの方と同じだ」

「あの方って誰を言っている？」

そうは言っているが、実はもう分かっている。ここでおそらく自分を知っているであろう

唯一の人間に心当たりがあった。

時世は辛くて答えられない彼女に、代弁するかのように自分でその質問に解を与える。

「北郷一刀、か？」

こくり、と頷くのを見て確信に至る。あの銅鏡が壊れた時、確かにあの時一刀もいた。

おそらくは一刀は自分がここにいるなら時世もいると踏んだのだろう。

だが、気になる事がある。それは、

「もう楽になったろ？ 趙雲答えろ。一刀とおまえの関係を」

「主従関係さ」

一瞬、全てが嘘ではないか？ と思った。それだけでなく、自分の推察全てははずれではないか。もしくはこれらすべてはドッキリだった。そんな考えがよぎったが、かぶり振

って忘れる。彼女を見るかぎり、嘘とは思えまい。
どうにか平静を保って、時世は続ける。

「で？ 俺を探してたのはアイツの命か？」

「いや、ここに来たのは最近野党共がこの辺りを根城にしてると聞いたからだ。私はその討伐にここに来ただけだ。お主にあったのは全くの偶然だ」

「俺の事は一刀から聞いてたのか」

「つくづく勘が良いなお主は。ああ、まったくその通りだ。主から良く聞いている。時世先輩と慕っておったよ。主はお主を尊敬しておられるようだからな。それを聞いて私もお主に興味がわいたのだ。聞いてた以上だ、驚いたぞ。そんな華奢な身体でまさか私に勝つとはな」

「勘がはずれてたら負けてたのは俺の方だよ」

「だが、お主は勝った。それは事実」

確かにそうだが、と反論しかけてその言葉を呑み込む。これ以上続けてもらちが明かない。彼女もそう思ったのか、追究してこなかった。

何はともあれ、彼は自覚した。ここは昔の中国だ。しかも恐らくは並行世界だろう。何が原因か。答えはすぐに出た。あの鏡である。一夏と一緒に追いかけたあのコソ泥の持っ

ていたあの銅鏡だ。

（くそがつ。あの変態色黒ヤロウ、今度会ったら殺す。絶対に殺す！）

胸の中でプランが練られる。

そんな中趙雲が起き上がり、突然、口を開く。

「星」

「？　なんだそれ」

「そうか、お主は知らないんだな」

この世界の住人には”真名”と言う名前とは別の”特別な名前”がある。だがそれは気易く口に出してはいけないものであり、本人の認めた者のみ、その名で呼ぶ事が許される

「じゃあ、俺はお前のお眼鏡にかなったという事か。光栄だね、趙子龍に認めてもらうなんてな」

皮肉気な調子で、蹴られた脇をさする星へ向かって言う。

「随分皮肉の利いた台詞だな」

「殺される所だったんだ。このくらいは甘んじて受けて貰わねえと割に合わねえんだよ」

「私も殺されと思ったぞ」

恨めしげに見つめる彼女を無視して、手を差し出す。

「ほら、立てよ。もう大丈夫だろ。休んでんじゃねえよ。君には俺を一刀のもとへ送って
もらわなければならないんだからな」

「本当にひどい奴だな、お主は」

立ちあがって、時世と星はそこから立ち去った。

くおまけく

「誰か私を倒せる者はいるかー！」

「ここにいるぞ！」

「遊んでねえでとっとと仕事しやがれ大たわけコンビが！」

ごっん！

「いったーい」

「何をするこのヤクザ男！」

「じゃかわしい！ 仕事もしねえで騒ぐわ、トラップ作るわ、いい加減温厚誠実な俺でも

しまいには怒るぞ!」

「もー怒ってるくせに」

「ほほう? どうやらこのリッパ―君の実験台になりたいようだな」

「仕事させて貰います!」

「さあ行くぞ蒲公英! 仕事だ!」

「はあゝい、貂蟬ちゃんです。うつふゝん。あら? この男いい男。背も小さくて可愛いわゝ。食べちゃいたい」

「……ね」

「あら? 私の魅力に夢中になっちゃったのかしら? 罪ねー私って」

「……し……ね」

「え?」

「死ねええええええええええ!」

「え？　ぎゃあああああああ………！」

「な、何！　あの筋肉たるまにあんなにダメージを負わせるとは！
ていうかほぼ死んで
いる」

「あのお兄ちゃん、あんなに細いのに何処にあんな力があるのだ？」

「貴方が時世ね」

「ああ、そうだけど。君は、曹操か？」

「貴様、華琳様に何たる無礼な口を！」

振り落とす前に腕を掴み、足払いでバランスを崩させる。時世は
表情を変えずに、目線
は曹操へ向けたまま、皮肉気に言う。

「部下の躰はどうやらいい様だな。さすが大国だ恐れ入った」

「貴様！」

「秋蘭、抑えなさい。これ以上私に恥をかかせるつもり」

「ほう？　どうやら有能なのは部下だけじゃ無い様だな」

「噂通りの皮肉屋ね」

「お褒めの言葉として受け取っておくよ」

「ふふふふ」

「へへへへへ」

この二人が揃ったら怖いな。

「あんたが時世ね。いい、言っておくけど。華琳様に迷惑を賭けるようならこの私が」

「うっせえ、黙ってるド変態女が。俺の周囲十メートル以内に入るな。臭いから。ほら、骨をやるからあっちいってろ、しっしっ」

「な!?! 私は大じゃない!」

「よく私を犬にしてくださいと華琳に懇願してるんじゃないか。ほら、涎垂らすしか脳のねえ駄犬は外にでも出て骨でも探してろよ」

「私を犬にしているのは華琳様だけよ! あんたの様な汚れた男、私から願ひ下げよ」

「ありがとう。生まれてからこんなうれしい事は無い」

「本気で嬉しそうな上にそんなにさわやかに言われると本気で腹立つわ」

「うっせえ！　いいか？　俺はな非生産的な考えの奴が大嫌いだ！　女が女を好きなら？　男が男を好きになる？　いいか！　そういうことがしたけりゃ一辺死んでからしやがれてんだ！　分かったか！　この恥知らずの超絶変態駄犬女！」

「は、はい……」

「いいか？　最終通告だ。二度と俺の前でそう言う事をすんな。もし破ったら」

「やぶったら？」

「最近作った『清く・正しく・汚さずに』がモットーのリッパー君の始動がまだなんだ。

……実験台も」

「わ、わかったわ。これからは貴方のいない所でするわ」

みたいな妄想が浮かんだ。

「酒を飲むわよ。時世付き合いなさい」

「一人で行ったら？ 俺は仕事で忙しいんだ」

「仕事って、あんたの仕事はもう終わってる事は確認済みよ。言い訳無用」

「いやな、最近リッパー君のバリエーションがマンネリになってきてな。ここいらで新しいのを」

「早速行きましょう時世。お酒一杯飲ませてあげるわ。忘れる程に」

「は？ 何言ってるんだ雪蓮、なんでそんなに必死なんだ、うわっ！」

（忘れさせなければ！ あの拷問道具が強化されたら……）

想像するだけで恐ろしくなり、背筋がゾクリとした。

ハーレムとか浮かばねえ！ 恋姫の世界だとすげえ暴力的な感じになってしまう。

でも、それが時世クオリティ。

設定は、時世は一刀君の先輩ですね。偶に会話文で出て来る不動（だっけ？）とよく一

緒にいて、剣道部の相手を偶にしてやってる的な感じですね。ちなみに無敗（素手で）。

ていうか、戦い方と性格がギャルゲーにあわないと思う。色仕掛けとか興味なさそうだし女にも容赦ないし。

でも、焰耶と蒲公英と絡ませたら面白そう。ちなみにリップー君とは、「清く・正しく

汚れずに」がモットーの拷問道具。銀魂で出たのがリップー君4号。鼻毛をマスタードと

かケチャップで染める道具です。恋姫は、水車車に人間を貼り付けて、ただひたすらに回

されると言った感じですね。あと、思いついたのが木馬を利用した……まあ、ここまで

します。それでは。

もしも〇〇に転生してたら2（後書き）

いや、なんつか。無謀だなー。

基本暴力的なヤツが、ハーレム要素満載の世界に行ったらどうなるかなーって感じで書いたんですよねえ。

第二巻編。なるべくすぐに書き上げます！
ちなみに『父様』は変更しません。これは確定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3110t/>

人間嫌いな三十路目のIS使い

2011年10月4日12時51分発行